
魔法少女リリカルなのはA's ~ 夜天の王と無窮の魔王 ~

Cry

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはA's ～夜天の王と無窮の魔王～

【Nコード】

N1136X

【作者名】

Cry

【あらすじ】

ある世界の魔王が勇者を庇い、光にのまれた。

気がついたらベットの中心、となりには見知らぬ少女、しかも記憶も感情も欠けている!?

優しい少女の家族となった魔王は、何を見て、何を思うのか。

この作品はオリ主最強主義ですので、苦手な人はスルーして下さい。

この作品は、ログインする事が出来なくなった私、Cryが、アカ

ウントを取り直して加筆修正を加えながら投稿している物なので、既にある、魔法少女リリカルなのはA、S、夜天の王と無窮の魔王、と同一作者、同作品であります。お気に入り登録してくださいの方々、ご面倒お掛けしますが、こちらをご登録お願いします。

第0話〜PROLOGUE〜

〜PROLOGUE〜

人の歴史が始まるより遙かな昔、破壊という概念が形を持ち、一つの個となった存外 無窮の破壊者 は、無限に繰り返す破壊の果てに 生命 を知った。

破壊者はソレを求めたが、自分が破壊者である以上その願いが叶う事は無い。

そこで破壊者は生命に触れる為、有り余る力を押さえるべくにその魂を二つに分けた…。

とある世界「魔界」と呼ばれる世界の、何も無い荒野の様な場所で二人の男が対峙していた。

この魔界では、‘カこそが正義’それが唯一にして絶対のルールだった。

荒野で対峙する その二人は共に魔界を二分する勢力の頂点、つまり魔界最強の存在、

「魔王」と「霸王」。

二人は時を同じくして魔界に生を受け、弱肉強食の世界を支え会いながら生き抜いてきた。

「霸王」は破壊衝動が強い変わりに確かな感情があり、
「魔王」は破壊衝動が無い変わりに喜怒哀楽といった感情がわからない。

強大な力を持つ二人は‘カこそが正義’それだけがルールである魔界において、その力を持つって頂点に君臨し、一時の平和を築いた。

だが、今対峙している兄弟とも言える二人を包む空 気はとても

穏やかとは言い難かった……

「霸王よ、なぜ……、なぜ今になってこんなことを……」
向かい合う二人、永い沈黙のあと零れた言葉は、単純な疑問。共に歩んだ仲だからこそ魔王には霸王の意図が図れない。

「俺にはもう時間が無いんだよ……、方法もなあ……」
だからとつと決めようぜ、オレとオマエ、どっちが強えーのかをよお……!!」

これ以上おしゃべりをするつもりは無いと霸王の瞳は語っている。避けられないならば戦う他はないと、魔王は覚悟を決めた。

「行くぞ……」

動き始めたのは二人同時、響くのは炸裂音、ぶつかりあう 破壊
と 破壊 頂上同士の 力 と 力

この空間には二人だけ。その他全てが形を保てず大地ですら崩れていく。

その戦いは一瞬とも一分とも思え、一時間とも一日とも、あるいはそれ以上かもしれない

だが全ての物に終わりがあるようにこの戦いにも終わりが訪れた。

「これで、終わりだ……!」

「ありがとよ……、悪いが……あとは頼むぜえ……」

霸王は自身に迫る極大の魔力を見つめながら、言葉を残して魔力にのまれていった。

最後まで立っているのはただ一人

「なぜ、なぜなんだ……」

魔王は霸王の残した言葉の意味を理解出来ず、虚空に向けて呟いた。

その後霸王の領地は霸王の部下の手により安定を取り戻し、 魔

界はもとの平和な姿に戻った。
ただ、魔王の心と体に傷を残して…。

霸王との戦いから一ヶ月ほどたった頃、魔王の側近である四天王の一人、魔將軍デュランが反旗を翻した。

「霸王との戦いで傷付いている今が好機！！
魔王様、貴方を葬り、私が魔界の王となる！」

野心をむき出しにしたデュラン、傷付いた今は部が悪いと悟った魔王は魔の立ち入れない結界をはり、しのいでいた。

「さすがは魔王様ですね。傷ついているにも関わらず、これ程強力な結界を張れるとは…」

デュランも想像以上に強力な結界に阻まれ手を出せずにいる。

「フフフ…いい事を思いつきました」

この結界は魔界に生きる者の中でも頂点に君臨する魔王が張った物。例え側近の四天王といえど、魔として劣る以上突破する事は叶わない。

そこでデュランは考えた。魔に属さない地上の人間ならば結界を越えられるのではないかと。

「問題はどうかやって人間と魔王を戦わせるか、ですかね…」
少し考えたデュランは部下に命じて、魔王の名を語り王国の姫をさらわせて強者をおびき出し、魔王と戦わせる作戦に出た。

魔王は考えていた。

霸王は自分には時間と手段が無いと言って戦いを仕掛けてきた。それはつまり最初から負けるつもりだったのではないか…。

霸王は最後、何に礼をいい、なぜあんな行動に出たのか、答えのない自問自答を繰り返している時

「お前が魔王だな！オレの名はキック・コータイド！！お前を倒し、姫をお救いしてみせる！」

声のした方を見ると、魔を絶つと言われる聖剣と思われる剣を持った青年と、後ろにもう三人、あわせて四人が立っていた。

それを見た魔王はデュランの言葉だと言う事、戦いは避けられないだろう事を悟る。出来れば話し合いで解決したい所だが、戦いを挑まれて拒んでは魔王の名が廃る。

恐らくこれではデュランの思いつきなのだろうが…

「来い、相手をしてやる」

激しい攻防の後、とうとう魔王は聖剣に切れかかれ力尽きてしまう。聖剣の名は伊達ではなく、全快の状態ならまだしも今の傷付き、結界に魔力を費やした状態の魔王には聖剣を止める術が無かった。

「人間の皆さんご苦労様でした、お陰で邪魔な魔王を始末出来たようです」

労いの言葉と共に現われたデュランは、右手を掲げ強大な魔力波を放つ。

「お礼に貴方達を葬って差し上げますよ。」

魔王様をも切り裂く聖剣を、このまま野放しにするわけにもいきませんしね」

勇者達に怒涛の攻撃を始めるデュラン、聖剣があるとはいえその差は歴然、何より勇者一行は魔王との戦いで力を出し尽くしてしまっていたのだ。

そんな中、瀕死の魔王は戦うデュランと勇者一行の姿を見てある事に気付く。

自身の腹心、四天王が一人、魔將軍デュランが何者かに操られて

第1話〜出会いは必然〜

魔王は光にのまれながら霸王の残した言葉を思い、 呟いた …

「 ようやく少し…わかったと思ったんだがな…」

魔王には喜怒哀楽が分からなかった、だが今は少し違う。 唯一の兄弟との死別、長年共に戦ってきた部下の裏切り。それらは魔王の心に傷を負わせた。

きつとこれが「哀しみ」

そして、その両方のきつかけを作ったであろう何者かに対する思い、
きつとこれが「怒り」

だがもう手遅れ、何を思ったとしてもこの状況は覆らない。

「 頼むと言われたんだがな、スマン…」

約束は守れそうに無いと呟き、勇者がデュランを切裂くのを見て

「 ここまでか」

魔王はこの世界から姿を消した。

空は暗く、数多もの星が輝いていた。そしてここに空を見上げる少女が一人。少女は足が悪いのか車椅子に乗っていた。立派な家だが少女以外に人はいない。何処かに出かけているのでは無く、少女が幼い時にこの世から去ってしまった。家をよく見ると車椅子でも生活しやすいようにバリアフリー住宅となっている。少女は相当前から足を悪くしているらしい。

見た目は10歳位、こんなに幼い子供がたった一人で生活しているのは信じがたい事である。

よほど心の強く、生活力のある子なのだろうが、この場合、慣れ、

の部分が大きいのだろう。一人でいる事への慣れが…

だが、やはりひとりぼっちは寂しいのか、少女の顔は暗い…

「ハア〜」

もう何度目か分からないほど溜め息を付いている自分が嫌になり、また溜め息を付いた。

「ハア〜やつぱり一人は寂しいもんやな」

呟いた言葉は少女の本心。それも仕方ない事、少女はまだ9歳なのである。泣かないのは、泣いたらもっと辛くなるだけという事を既に知っているから。

ネガティブな考えを振り払うかのように少女は再び空を見上げた。

普段は孤独なんて気にならなくなってきている少女だが、寝付けない夜は無性に一人が怖くなるのだ。どうしても考えてしまう自分の未来…もしかしたら、自分はこのまま一生一人なのではないか…

そんな気分が沈む時、少女は決まって夜空を眺めた。散らばる星、大きく輝く月、無限に広がる漆黒の夜空…

それらを眺めていると、自分は一人ではないと…決して孤独ではないと、そう思えるのだった…

しばらく星を見て少し落ち着いた少女は、それ、を見つけた。

「あつ流れ星や！」

願い事をすれば願いが叶うと言われていた流れ星を見て少女は焦る。願い事は星の流れている間に済ませなければならぬからだ。

「ど、どないしょ!?!どないしょ!?!」

しかし、迷いは一瞬だった

「そっや!かつ、家族が欲しい!!」

紡がれた言葉は、おおよそ現実的では無いものだった。されど、故の願い。

「ちよつと無理な願いやったかな?…って確か願い事は三回言わなあかんやつたつけ…もう間に合わへんなあ…」

冷静さを取り戻し、自らの失敗を悔やむ少女。もう一度見れないかと顔を上げた少女が見たものは、なんと自分へと向い迫りくる、流れ星、

「あつ、流れ星！えーと、家族が欲しい家族が欲しい家族が欲しいって、なつ、なんでやー！ー！！」

流れ星は、しっかりと三回願い事しながらも、驚愕と共に叫ぶ少女の上を通過し、少女の家に衝突した。

ドゴォ！！

大きな音と共に何かが家に何かが落ちたらしく、少女が何かが落ちたであろう部屋に行くと、なんとそこには、自分と同じ位の年だろう少年が倒れていた。

「なつ、なんや！もしかして、願いが叶ったんか！」

少女はパニック状態の頭で先程の願いを思い出した。願いが叶って人が降ってくるなど到底あり得ない事だが、この状況で幼い少女に冷静な思考を要求することもまた、不可能と言えた。

「う…こ、ここは？」

少年に意識があつた事に気付いた少女はパニックと現実逃避から全力で抜けだし、車椅子を巧みに操り、少年を抱き起こした。

「大丈夫ですか！」

空から降って来ておいて無事だったなら、それはそれで問題ではあるが、今の少女はそんなことを考えたりはせず、心の底から少年の身を案じていた。

「だ、誰だ…」

少年は喋ってこそいるが、殆ど意識が無いと様に見える。

「私ははやってっています。それより喋らんとして！今人呼ぶから！」

そう言い、少女、はやて、は救急車を呼ぶか、警察を呼ぶか迷った後、自分の担当医である石田先生に連絡する事にした。

「自分の名前とか言える？」

石田先生に余り動かさない方がいいと指示されたはやてはとりあえず名前を聞いてみた。

「オレは、マオ」

少年ははやての質問に答えようとして、意識を手放した。

第2話 決定は必然

男は夢を見ていた。

光にのまれた自分。

そしてその光の中でオレに微笑む‘ ダレカ’

オレはその‘ ダレカ’を知っている筈だった…だけども分からない

…思い出せない。

そんなもどかしさを感じている時その‘ ダレカ’は微笑ながら呟いた…

「お前は、生きる…」

優しく、けれども力強く呟いた‘ ダレカ’は、手に刀を持っていった。

オレはその刀に見とれていた…。曇りの無い刃は見ているだけで切られてしまうと錯覚させ、纏う 気はオレを安心させる。

そしてその‘ ダレカ’は刀を振るい光を切裂いた。

「俺は…お前と共にある」

最後に言葉を残して‘ ダレカ’は消えた…

ここは病院の一室。この部屋には今、二人の子供がいた。

一人は少年、一人は少女。少年はベットの中で寝ていて、少女はその隣りで車椅子に乗っていた。

少女の名は“八神はやて”彼女は昨晚流れ星のように空から降ってきた少年を病院に連れて行ってもらったあと、病院で眠り、朝一番で少年の様子をみにきていた。

「昨日は暗くてよく見えへんかったけど、綺麗な顔やなく。髪もサラサラやし…」

はやては少年の黒い髪を静かに撫でながら呟いた。

しばらく見つめてみると段々恥ずかしくなってきたはやては、無意識の内に少年の髪を撫でていた事に気付く、

「こっ、これは違うんや／＼手が勝手に！」

と、一人でうろたえ始めた。

「此所は…？」

オレが目を覚ました場所はやけに綺麗な部屋だった。

ここは何処なのかと思えば部屋を見渡そうと横を向くと、そこには一人身悶えている少女がいた。

具合でも悪いのだろうか…

「どうした…何をしている…？」

取り敢えずここがどこなのか、なぜ自分はここにいるのかという疑問より、隣の少女の事のほうが気になったので声をかけてみた。

「あっ！気がついたんやね！どこか痛いところとかあらへん？」

先程まで身悶えていた少女は、打って変わって元気に声をかけてきた。どうやら少女は具合が悪い訳では無いらしく、逆にこちらの心配をしている。

「ああ、問題ない。ところで、此所は何処で…お前は誰なんだ…？」

少女の笑顔を見て悪い人間では無いと判断したオレは、質問をしてみた。

他人を見た目で判断するなど、どうしようもない愚の行為だが…この少女の笑顔は、疑う事こそが最も愚かな事だと思わせる程に、純粹で晴れやかなものだった。

「私の名前は、八神はやて。はやてって呼んでな

…ほんでここは鳴海大学病院の病室や」

案の定丁寧に説明してくれたが…病院…？病室…？成る程…分か

らない事が多すぎる という事はよく分かった。

「八神、もしかすると…ここは地上なのか…?」

少女八神は、少し不満そうな顔をした様に見えたのだが、オレの質問について答えてくれた。

「地上?確かに地上といえれば地上なんやろうけど…ここは日本の鳴海市やよ…?」

ニッポン…?ナルミシ…?

やはり聞いた事が無いな…地上について詳しい訳では無いが…どうにも聞き覚えの無いイントネーションだ…

「そういえばHg「は?や?て!」……………はやて…?」

喋ろうとした矢先、いきなり言葉を遮られたと思ったら、何か得体の知れない気迫を漂わせるはやてが自分の名前を強調してきた。

その気迫に圧倒されたオレはどうにも逆らえないと感じ取り、恐る恐る名前を呼んでみた。

すると一転してはやては、満面の笑みを浮かべうなずいた。

……………どうやら名前で呼ばれなかったのが不服だったらしい…。

「はやて…オレは…なぜここにいるんだ?」

落ち着いた所で先程言おうとした質問を試してみたのだが、次の瞬間、とんでもない返答が返ってきた。

「…なぜってそれは…昨日の夜な、いきなり降ってきたんよ…空から…」

はやて曰く…どうやらオレは空からはやての家に落ちて意識を失い、この病院という施設に運ばれたらしい。

そしてオレはある事に気付いた…

「オレは 誰だ…?」

そう、記憶が無いのだ。

「え!?それってもしかすると…記憶がないって事なんか!?!」

心底驚いた様子を見せるはやて。だが、無理もないだろう…表現の度合いに差異はあれど、自分でも一応驚いてはいるのだ。

「いや、元いた世界の事は…なんとなくだが覚えているんだが…自分の事が…何一つ分からないんだ…」

思い出そうと記憶を辿ろうにも、思い出そうとすればするほど混乱していくようで…何が何やら…さっぱりだ…

「えっ、でも昨日名前聞いたら“マオ”って名乗ってたで？」

昨日か…？ 昨日…きのう…キノウ…？

「…昨日の事も…覚えて無い…」

「あつ、そうなんか…じゃあ…名前無いと不便やし、マオって呼んでもええかな？」

マオ…か…、何処か懐かしい響きな気がする…。

なんとも言えないが…きっとこの名前であっているんだろう。

そうだな、そういう事にしておこう…

「ああ、そう呼んでもらって構わない」

「うん じゃあマオって呼ぶな」

…… なんか、笑顔が…眩しい…

「ところでマオ、一つ聞いてええ？ さっき言った、元いた世界ってどういう意味なんや？」

そういえばそんな事を口走ってしまったか…

まあ、到底信じて貰えないであろう話だし…話してもいいか…

「その事なんだが…恐らくオレは、別の世界から来たのかも…
れない…」

この部屋も見た事が無いものばかりだし…

オレの世界はここまで発達していなかったからな」

そう…臆気な記憶だが…地上を含めたとしても、ここまで綺麗で整った場所はありません…

「そうやったんか…別の世界…それやったらお空から降って来たのも領けるつてもんやな…」

「……？」

なあ、はやく…その…疑ったりはしないのか…？

それとも…よくある事なのか…？ 別の世界とかって言うのは…」

「ここまで発達していると、こんなことは日常茶飯事なのか…？」

「？別の世界なんて普通は無いと思うけど…」

「マオは嘘をついているんか…？」

「さすがに…日常茶飯事では無かったか…」

「いや、オレは仮説を言ったまでであって…嘘をついた訳では無い…」

「そんなら問題あらへん。私はマオを信じる」

「そうか……………」

その後しばらくの間、二人は言葉を交わさず、どこか心地のいい沈黙が続いた…。

「…そういえば…マオはこの後行き先どうするん？」

石田先生は今日中に退院出来るっていうたけど…別の世界から来た上に記憶喪失なんじゃ、行く宛無いんやないか？」

先に沈黙を破ったはやては、マオの今後を案じて問う。

「さて、どうするか…」

当然、何処にも行く宛など無いマオは言い淀む…

マオは一瞬、世界制服でもすれば良いのではないか…と考えたが、直ぐにそんな事は不可能だと首を横に振るい、何故そんな事を考えたのかと悩み、頭を抱え込んでしまった。

「やつぱり、行くあて…ないんか？」

頭を抱えるマオを見ながら、はやては身をのりだし、不謹慎だと知りながらも期待で目を爛々と輝かせてしまう。

「…ああ…その様だ…」

マオが頷くと、はやては顔をさらに明るくして実はずっと言おうと考えていた提案をする。

「じゃ、じゃあ…私と…私と一緒にくらさへん!？」

はやては、不安を抑え、自分が持つありったけの勇気を振り絞って、その一言を言い切った。

「もう少し考えてから言っただな…初対面でしかも得体の知れないオレな」
「ストップ!!」…「またか」

マオにとつて、その誘いは決して悪いものではないが、少々冷静さを欠いている様子のはやての事を考え、冷静になるよう諭そうとするも、その言葉ははやて自身によって遮られた。

「マオなら大丈夫や！それに困ってる人は助けなあかんよ？」
全く…その自信は一体何処から来るのか…どうにもはやては優しすぎるな…「まあいいか。」

「わかった。その誘い…受けさせて貰う…ありがとう…はやて…」

結局勢いに乗せられてしまった気がするが…まあ…あんな顔されたらな…

「決定や これからよろしゅうな！マオ！」

第3話〜喜びは必然〜

幼く、小さなその身体に孤独を受け入れて生きてきた少女、八神はやて…

彼女が心の底から喜びを感じる事が出来なくなってから、もう幾何の時間が流れたか…

しかし変化は唐突に訪れた…

少女は今、確かな幸せを…喜びを感じている…

…だが、それもその筈である。

なぜなら彼女に…新しい《家族》ができたのだから…

~~~~~

八神はやて。

彼女は幼い頃、物心のつくより前に両親を失ってしまった。

故に今現在、僅か8歳の身でありながらたった一人で生活している。

さらに不幸な事に、自力で歩けない程に足を悪くしているため、小学校も休学していた。

足の治療の為に通いつめている病院に行けば、検査こそ億劫だが、優しい石田先生に会え、それなりに楽しい時間を過ごさせる。

だが、やはり基本はいつも一人なのである。

まだ幼い彼女には、家族との団らんも無ければ、友達と遊ぶ事も出来ないという状況は、決して耐え切れる物ではない筈である。

その考えに至りはやてを心配する人間は、担当医である石田先生を含め何人もいる。

石田先生らは、はやての足を早く治し、せめて学校に通わせてあげようと必死に検査を繰り返すのだが、それでも一向に足は良くなり、原因さえ不明のまま…

医師達は、一向に回復の兆しの見えない足を前に、はやてが不安がらないようにと、自分達の焦りを隠し、なるべく自然に振る舞う。それを知ってか知らずか、はやてはいつも笑顔でいた。

周りの人に安心してもらう為に、私は大丈夫だと思ってもらえるように…

自分が嬉しい訳では無い、楽しい訳では無い。

己の為ではなく、他者の為に笑顔を作る…

悲しみは自分の胸にしまい、他人の笑顔の為にはやては明るく振る舞う

そしてその笑顔は、例え仮初めだとしても、確かに医師達の励みとなっていた

そんなはやては辛さに耐えきれなくなった時、いつも誰もいない我が家で夜の星空を眺めていた。

広い広い夜空を見てみると、まるで夜の闇が不安を拭ってくれるかのような、輝く星が自分を励ましてくれるかのような、何ともいえない不思議な感じがして、言い様の無い安心感を感じるのである。

そしてある夜、少女に贈られた夜空からのプレゼント。

流れ星に願いを託し、有り得ない事を夢想して、そして現実に戻った時…闇の向こう側から、それ、はやてってきた。

…なんと、少年が降ってきたのだ。

それは悲しみに耐える彼女への励ましか、はたまた只のイタズラ

か。  
しかし、理由も経緯もどうでもいいのだろう。  
なぜならこれはきつと《運命》なのだから。

~~~~~

「どうした…？ なぜそんなに上機嫌なんだ…？」
マオが共に暮らす事を了承した途端、はやては今まで以上の笑顔をマオに向けていた。

「だって、わたしに家族ができたんやもん！嬉しすぎて泣いちゃいそうや！」

そう言いつつ微かに潤む片目を拭ったはやては、少し表情を暗くして、静かに呟いた…

「……私…今までずっと一人やったから…」
言い終わるとはやては少し俯いてしまった。

「……………」
最後の方は声が小さくなっていったが、マオには確かに聞こえていた。

「一人…？」

普通、子供には二人の親がいるはずだ。
ほぼ記憶喪失同然のマオにでもその程度の知識はあった。
ならば一人という事はまずありえない。

だがはやては一人といった。その意味する所は、つまり…

「うん…お父さんとお母さんは、私をもっと小さい時に…」

「……………」
「そうか……………」
ますます元気が無くなっていくはやてを前に、マオは何の感情も籠らない声で一言だけ返した。

なんとも気が利かなく素っ気ない反応だが、はやてには下手な同情や慰めをされるより何倍もありがたく思えた。

「でも、もう大丈夫や！」

「……………」

暗い表情から打って変わって、いきなり先程までの元気を取り戻したはやてに、思わずマ才は疑問符を浮かべてしまう。

「だって…マ才が…一緒にいてくれるんやろ？」

はやては先程までの重い空気を振り払うかのように上目遣いでマ才に問うた。

その瞳の奥には微かな不安が見え隠れしている。

今の言葉にはかなりの勇気が必要だったと言う事はまず間違いないだろう。

「ああ、ずっと一緒にいてやる」

マ才の口から自然とそんな言葉がもれていた。

しかも、マ才自身ですら驚く程優しい声……

だが悪い気はしていなかった。マ才は何故かこの少女を守りたいと思ってしまうていた。

この気持ちは何なのか、一体何処から来るものなのか…疑問に思えど、今のマ才はその解を知り得る術を持ち合わせてはいなかった。

「ノノほっ、ホンマか？ずっと、ずっと一緒にいてくれるんか？」

顔を真っ赤にしたはやては体の不自由を忘れたが如く身をのりだして聞いていた。

「どうやら、ずっと」という単語に反応したらしい。

冷静に考えてみると、ずっとは言い過ぎたかもしれない。そう思い直したマ才だったが、どうやら今さら訂正はきかなそうだった。

まあ、いいか…。

マ才は心の中で呟いた。

それにしても…

「はやて、顔が近い…」

マ才はとりあえず、今にも衝突しそうなくらい顔を近づけている

はやてに声をかけてみた。
すると…

「はわっ、はわわわ／＼こっ、これは、ちっ、ちがうんや／＼」
はやては素早くて身を引いたかと思えば、手をぶんぶんと振りながら何かを否定し始めた。

「大丈夫か…？」

はたから見ると余り大丈夫そうではないが…
はやてはだいぶうるたえていたが、暫くすると落ち着きを取り戻したようだった。

「だっ、大丈夫や、嬉しくってついな／＼」

まだ顔は紅いが呼吸を整えながらはやては答えた。

……………

「嬉しい…か……………」

「嬉しい…か……………」

マオは少し表情を暗くして呟いた。
どうしたんやるか？

変化は少しだったけど、妙に気になった私は直接聞いてみる事にした。

「どうしたん？」

そして私は、次にマオが発した言葉を聞いてビックリする事になる。

「嬉しいってというのが…いまちよく分からないんだが……………」
「なっ、なんやて!？」

(記憶が欠けているってというのは聞いていたけど…まさか、嬉しさに分らんなんて…そんな事ってあるんやな)

…ハッ!こんなこと考えとる場合や無い! なにか言うて元気付け

てあげなあかん！

……うっくん……うっくん……そうや！

はやてなりに必死に頭を捻って考える事数秒間。

「なら、私が教えてあげる！！ずっと一緒にいるんやから、時間はたっぷりあるしな」

（我ながらナイスアイディアや！でも、どうやって教えてあげればいいんやろか？）

名案が浮かんだは良いが、言葉にした直後に不安の種が頭を過る。

「そうだな……」

（あれ？なんか反応が薄いな……？）

必死に絞り出した案ではあったのだが、マオからは期待したような反応は無い。

普通、自分の知らない事を教えて貰えることになったら 少し喜ぶ筈なのだが……

（もう少しくらい喜んでもいいと思うんやけど……）

思ったより反応が薄かった事に少しへこんでいたはやてだが、マオの言った言葉を思い出す。

彼は先程、嬉しさが分からないと言っていたのだった。

つまりは、嬉しいということが分から無いと言うのは、【喜び】が分からないという事と同じなんだと結論に達したはやては、ある決意をした。

（うーん。よく分からないけど、とりあえず喜ばせてあげればいいんやな！ なら、絶対マオのことを喜ばして ‘嬉しい’ っていうのがどんな物か教えてあげるんや！）

両の手を小さく握り、はやては静かに決意を固めた。

コンコンコンコン…

はやてがマオを喜ばせてあげるといふ決意を固めていた時、ノックと共にドアを開けて石田先生が入室した。

その後ははやては、石田先生にマオが記憶を失っている事、家族も行く宛も無い事、私と一緒に暮らしてくれと言ってくれたこと、そして、嬉しさが分からないと言っていた事を説明した。

それを聞いた石田先生は、はやてとマオと一緒に暮らすという事について暫くの間、難しい表情で考える。

個人的な意見を言えば、大切なはやての為にOKと言いたいと石田先生は考えている。

…が、常識、警察、保護、精密検査等々、様々なワードが次々に浮かんでしまう。

最早これは一介の医師が決めていい範疇を越えてしまっているのだ。先ずは上司に報告するべきなのであろう…

だが、チラリと前を見ると、そこには期待で瞳を爛々と輝かせているはやてがいるではないか…

せつかく咲いた笑顔の花を摘む様な事はしたくない…しかし、マオ少年の未来が、人生が掛かっている事も忘れてはいけけない。

頭を抱えて悩みに悩む石田先生。

それを見つめるはやてと眺めるマオには、その苦悩の程を知る由も無い。

その後、小一時間に渡ってははやては石田先生を説得し続けた。

その様は洗脳と言っても良いものであり、今現在正常な思考判断を行えているとは言いがたい石田先生を、少しずつ懐柔していった。

その甲斐あって、はやては遂に石田先生の首を縦に振らせる事に成功していた…

マオについての説得と説明が終わった後は、ずっとマオの検査をやる事になっていた。

結果は、少し頭を打った程度で、特に異常は無いという事だった。

はやては石田先生に、マオは嬉しさが分からないという事を説明してあったので、身体検査の他にも精神についての検査もやる事となった。

結果はと言うと、マオは頭を打ったショックで、一時的なのか永久的なのかは分から無いが、とにかく【喜怒哀楽】が分からなくなってしまったらしい。

記憶も感情も、何かきっかけがあれば思い出せるかもしれないし、自然と思い出すかもしれないが、逆に一生思い出せないかもしれない。

「そうか……」

当然マオはその結果を聞いても何を感じるわけでは無いが、はやては自身の幸福はマオの身の不幸からもたらされた物なのだと思います。

しかし、はやてがそれを嘆いた所で何も変わらない。ならば……

「マオっ！ずっと一緒に暮らして、二人でいっばい幸せになる？」

そう、嘆いて足を止めるのでは無く、二人で幸せを求めて前に進む。それこそがやるべき事だと、はやては心に刻み込む。

「ああ……これから宜しく頼むよ……はやて……」

検査も終わり、今日は家に帰っても大丈夫だと石田先生に言われて、二人は帰る準備をしていた。しかしその歳に、ちよつとしたトラブルが起きた。

……マオが着る服が無いのだ。

マオが元々着ていた服があるのだが、それはとても普通の町を歩くには向いていなかった。
なんせ割りと地味だが一目で住む世界が違ふと思わせる、つまり普通では無い服だったのだ。

結果、病院着のまま石田先生に車で送って貰い、なんとか家に着いたのであった。

「マオ、家に帰ってきたら、ただいま、っていうんよ？」

先に家上がったはやては、玄関にいる、新しい家族、にそう教えた

「ただい…ま…？はやて…」

「うん お帰りなさい、マオ！」

マオとはやてが一緒に暮らし始めてから、早くも一週間が経過した。はやてはマオに挨拶の仕方や常識など、知っている事を丁寧に教えた。

まだはやて自身が子供という事もあって知識の量や理解が及ばない所も多々あり、そういった所は石田先生が教えていた。

幸いな事に、マオは何一つ物を知らないと言う訳では無く、理解力もかなり高かった為に、この一週間ではやてと同等程度の常識を得ている。

そしてマオはこの日、はやてと共に図書館にやって来ていた。

マオはこの図書館と言う施設ががとても気に入っていた。

静かで、ここにいる人達は皆、読書に集中している。

そしてなにより、この膨大な本の数々。

マオは、はやてや石田先生に文字の読み書きを一通り教えて貰っていたので、その範囲で読める物から読んでいき、さらに知識を増やしていった。

今ではもう一般常識やこの国の歴史、その他様々な知識を有している。

「ふう…終わりが…」

読み終わった本を閉じ、次は何を読もうかと立ち上がり本を眺めていた所で、はやてがやってきた。

「マオ、もう少しで閉館時間だから、もう帰る？」

「ああ…そうしよう…」

いつの間にそんな時間になっていたのかと思いつながらマオははやてと図書館を後にした。

「今日の晩ご飯は何がいい？」

いつもの様にはやての車イスを押して歩道に行く途中、はやてマオに問う。

「オレは何でも……」

何でもいい。そう言いかけたマオだったが、こういう場合は、何でもいと答えるよりも、こちらの明確な意思を、相手の可能な範囲で伝えるのが良かった筈…と、日々の生活と読書に於ける考察を基とした持論を頭の中で展開し、返答を変えた。

「いや、オレはハンバーグがいいな…」

マオは考えた後、昼頃テレビで見た、ケ○タロウの男子ごはんの事を思い出して答えた。

「わかった！じゃあ材料を買いにスーパーにいこか！」

そうしてマオは、はやての乗る車椅子を押してスーパーに向かう事となった。

オレはこのスーパーマーケットには何度か来ていたが、やはり…慣れない。

人が沢山いて賑やかだし、至る所に大安売りだの特売品だのと

書いてあって、何がどの位安いのか良く…いや、全く分からない。

だがはやては慣れた様子で食材を選んで行く。

やはり経験値が違うと諦め、考えを放棄しようとしたその時、‘それ’はオレの視線を釘付けにした…

私が食材を選んでいた時、後ろで車椅子を押してくれていたマオが動かなくなったので、どうしたのかと思って振り返ってみると、マオは珍しく何かに釘付けになっていているらしく、立ち止まってその何かを見つめていた。

何を見ているのか確かめるため、視線を追ってみると…

「大特価！！リンゴ大安売り！！」

そこには真つ赤なリンゴが山積みになっていた。

もしかしてと思い、ある事に気付いた私は未だに止まっているマオに聞いてみた

「リンゴ、買って行く？」

はやての声で我に帰ったオレはオレを釘付けにした魅惑の果実、リンゴも一緒に買って貰い、はやてと共に家に帰った。

家に帰ったオレ達は一緒に夕飯の支度をする。

味付け等ははやてが行うが、オレも食材を切る位は出来る様になったのだ。

何度食べても思うが、はやての料理はとても美味しい…。

はやてが言うには、この‘美味しい’も‘嬉しい’と同じ様に【喜び】の一種なのだそうだ。

そしてリンゴを買って貰った時の感情…あれがまさしく【喜び】というものらしい。

もう少して何か分かる気がする…。

確証がある訳では無いが、何処か確信めいた物をオレは感じていた

…。

そうこう考えているうちにハンバーグは出来上がり、オレ達は食事をはじめた。

オレが…何を切ったのだった？

それは聞かないでくれ…。くっ、目が…目が…

「…いただきます」

このいただきます、ご馳走さま、おはよう、おやすみ、行って来ます、お帰りなさい、などの挨拶は欠かさず行っている。

恐らくはやては、今まで出来なかった‘当たり前’が出来るのが、嬉しい’のだろうと、最近になって思える様になった。

やはり【喜び】を理解出来る日は、そう遠くは無いだらうと思っ…

「…ご馳走さまでした」

今日の夕食を堪能し、早々に洗い物を終わらせたオレは、テレビを見ようとチャンネルを回した。

…が、直ぐに飽きてテレビを消した。

「マオ、早速リンゴ剥いたから一緒に食べよ？」

そう言っではやては、食後のデザートとして例のリンゴを出してくれた。

オレの有する知識に依るとあれは‘兎さんカット’つまり皮を耳にみたててVの字に残して置く切り方だ。

なんとも食べるのをためらわせるその形に戸惑いながらも、オレは思いきって一口かじった…

シャクシャクとした心地いい歯応え、適度な甘味に仄かな酸味…想像以上の瑞々しさ…

こっこれは…！

私が切ったウサギさんリンゴを、マオは少しためらいながらも一口

食べた。

ウサギさんの形を前に食べるのをためらうというマオの優しさを発見した後、マオに異変が起きた。

「どっ、どーしたんや！？なんで泣いているん？」

そう、いつも無表情のマオが、リンゴを食べた途端に悲しい表情を浮かべて涙を流していたのである。

私は少し慌ててしまったが、なんとか泣いている理由を尋ねてみた。

一体どうしたんやろか…やっぱりウサギさんの形はまずかつたんやろか…

等と私の外れな事を考えていると、

「いや、何でもない…少し…少しだけだが…記憶…が戻ったらしく…混乱している…」

どうやらマオは少し記憶を取り戻したらしい。

それはとても良い事、嬉しい事なんだけど…なぜ泣いているのかという質問に対する答えにはなっていないかった。

せっかくの吉報だと言つのに、あんな表情をされては喜ぶに喜べない…

だから、なぜ泣いているのかもう一度聞こうとした時、マオの方から話し出してくれた…

「この、リンゴという食べ物、オレのよく知っている奴の…好物だったようなんだ…」

記憶の中にいるのそいつは、赤いリンゴを食べ、オレに笑顔を見せてくる…

「そいつが誰なのかは思い出せない…けど、いつも笑顔で…リンゴを食べていたのを覚えている…」

オレはそいつに、なぜ笑っているのかと尋ねた。そして、そいつは笑顔のままオレにこう言った…

『お前にも、きっと解る日が来るぜえ…絶対にな!』
そいつは、そう言っておれにリングを投げ渡して来た…

「なぜそいつが笑っているのか、その時のおれは分からなかった…」

その時のおれは、そいつの笑顔を見ても何も思う事はなく、おれが理解出来る日なんて来ないだろうと思っていた…

「だけど、今なら解る…」

これが、嬉しいっていうこと…

これが、美味しいという事…

これが、【喜び】という感情…

「これが、喜びという物なんだな… はやてのお陰でおれも知る事が出来た…」

この事を記憶の中のそいつが知ったら、きっと自分の事の様に喜ぶんだろうな…

「ありがとう、はやて…」

きっとおれは今、笑って、いるんだろう…

私は、マオの笑みに見とれてしまっていた。

マオが記憶を少し取り戻した事、喜びを知れたという事、お礼をいってくれた事、わたしが喜ぶ理由として十分な物は幾つもあった筈。ただ私の時間は、マオの小さな笑みをみた途端に、文字どおり止まって、しまったのだ。

頭の中は真っ白くて、心臓は止まっているのではないかと錯覚するほど。

瞳にはマオの微笑、開いた口は塞がらない。

一瞬か、一分か、それとももっとか、時間は止まっているため分らない。

これは現実では無く、夢の中の出来事なのではないかと思う程。…だけど、やっぱりこれは‘現実’だった

「どうしたんだ…？はやて…」

聞こえて来たのは心配する様な家族の声。

それを聞き、ようやく時間が動き出した…

「なっ、なんでもあらへん！気にせんといてノノ」

時間が動き出した途端、顔が熱い。止まったかと思っていた心臓は、破裂しそうな程脈打っている。

きつと自分は今真っ赤になっているんだろう。

それを隠すかの様に言葉を続けた

「それにしてもマオの記憶が戻って私も嬉しい！もしかしたら、案外早く記憶も感情も戻るかもしれないへん！？」

少し落ち着いた私は思った事を言ってみた。

いまだに 胸がドキドキしているが、さっきよりはマシになっている。

「ああ、そうかもな…。だが、どうも感情については最初から無かったようだ…

あと、記憶については、今回のリンゴの様に…何かきっかけとなる物があると思うんだ…」

マオはいつものほぼ無表情に戻っていた

「まあ、焦る理由も無いしな…その内解る日が来るだろう…」

その後は二人でリンゴを半分ずつ食べてから、しばらくお話しをした後、考えを整理するため早めに寝る事になった。

~~~~~

ハァ、それにしても、あの笑顔は反則や…まだ胸がドキドキしてるし、何より頭からあの顔が離れないノノ

火照る頬に手をあてるはやては、気持ちを落ち着かせてから寝返りを打ち、隣で眠るマオに喋り掛ける。

「マオの記憶が少しでも戻ってほんまに良かった…」  
言いながらはやてはマオの手を静かに握る。

因みに、マオは自分の部屋を用意されたが、はやての希望により寝る時は一緒に布団で寝るのが習慣になっていた。

はやては最初こそ手を握る際に勇気を振り絞ったものだが、その時マオがすんなりと握り返した事に安心し、今では自然と握れる様になった。

「はやてのお陰だ…ありがとう…」

マオは天井を見つめながら呟く。

「でも、わたし何にもしてないと思うんやけど…?」

疑問を浮かべるはやてに振り向き、マオは答える。

「いや、そんな事は無い…はやてが一緒だったからこそその結果だと…オレは思っている…」

「……………マオ……………/ /」

その時ははやては、今が真つ暗な夜で本当に良かったと…つくづく思ったそうなの…

オレが取り戻した記憶の断片。

共に戦うオレとダレカ。

そして最期には言葉を残して倒れるそのダレカ。

それがダレで、一体なんて言っていたかは分からない。

だがその内解る日が来るかもしれない…はやてと一緒になら…

それよりも問題なのは、オレ中にある、この世界では普通あり得る筈が無い様な‘力’だ。

記憶の中のオレは確かに力を使い、ナニカと戦っていた。

マオは隣ではやてが寝息をたて始めてからも暫くの間いろいろ考

え込んでいたが、明日考えようと決めた途端に襲ってきた強烈な睡魔に抵抗せず、意識を手放し眠りについた。

## 第4話 救出は必然

4月

マオがはやてと暮らす様になってから、約一ヶ月

二人が過ごしたこの一カ月は、とても穏やかで、とても平和だった。

朝7時、マオはいつもこの位の時間に目覚めている。

最初の頃のマオは朝が苦手で、9時、10時にならないと全く起き上がる事が出来ない程だった。

しかし、その事を不満に思ったはやてが毎朝欠かさず‘ステキ’なモーニングコールを敢行し続けた事により、マオは多少ぼーっとしていて頭が回っていない状態ではあるものの、なんとか7時位には一人で起きれる様になっていた。

目覚めたマオは、先程まで寝ていたはやての部屋から自分の部屋へと移動し、眠い目を擦りながらも寝る時に着ているはやてと色違いのパジャマを脱ぎ、黒いズボンに白いシャツの普段着に、10分もの時間を掛けて着替えた。

この、服や生活用品の類いは、マオが病院で目覚めた日の翌日に、二人で一緒に街に出掛けて選んだ物だ。

…ちなみにその買い物に行く時にマオが着た服ははやての服だが、この年頃の子供は男女の区別が曖昧な上、はやての服は派手さが控えられたものだったので、マオが着ても特に問題は無かった。

「おはよう、はやて…」

着替えを終えたマオは、自室として使っている部屋を出てリビングに移動し、台所に立つはやてに朝の挨拶をした。

「ん、おはようさん、マオ。今日もちやんと起きたみたいやな」  
はやてはマオに気付き、挨拶を返す。

「まあ、毎朝あんな起こされ方を…されたらな…」

はやてはマオが朝余りにも起きないので、あの手この手でマオを起こしてきた。

中には「反応が面白い」とのことで遊ばれた覚えもある事を思い出したマオは、若干表情を強張らせる。

「それは、マオが起きないのがいけないんやで？ でも、マオは朝のあいだ少しおバカさんになるから面白くてな」

「……………おいおい…」

朝起きれなかったのは悪いと思っっているが、からかわれては敵わない、そう言おうとしたマオだったが、実際問題、現在進行形で頭が回っていないため、言うに言えないのが現状だった。

「マオ、10×10は？」

そんなマオにはやては追い討ちを掛ける。

「はやて、朝食にしよう…」

(じゅうがじゅうつだから……………あれ?)

なんとか話題を変えようと試みてるものの、さすがに無理があり、はやては乗ってこない。

「あれ、答えは？」

……………

「余りからかわないでくれ…」

マオは両手を上げて降参の意を示した。

それにより漸くはやてはからかう事を止め、笑いながら謝る。

懲りていないのは目に見えているが、はやてが朝にマオをからかうのは、仕方がない事だと言えなくもない理由が実はあるのだった。

その理由は単純明快。マオは頭が非常に良かったのだ。

初めの頃こそ右も左も分から無く、常にはやてに教えを乞うていたマオだったが、10日も経てばその知識ははやてを軽く上回り、更に10日経った頃には大人の石田先生すらも目を丸くする程の知識

理解を得るに至っていた。

その余りの物覚えの良さに、はやては少なからずつまらないと感じてしまっているのだ。

なのではやては、朝寝ぼけているマオを見るとついついイタズラ心が目覚めてしまうのだった。

その後二人は仲良く朝ご飯の仕度をした。はやても先程までの様に茶化す事もなく、慣れた手付きでスムーズに進行していった。

ちなみにメニューは、ご飯にワカメと豆腐の味噌汁、目玉焼きとホウレン草のおひたしだ。

「いただきます」

マオは朝食はパンか米かと聞かれれば、どちらかと言うと米派だった。なので基本的に主食は米が並んでいた。

「ご馳走さまでした」

食べ終わった後は分担して家事をこなすのが日課になっていた。はやてが洗い物をして、マオは洗濯をする。更にこの日は午後からはやての検査があるので、二人はいつもより早めに終わらせようと張り切るが、元々量が少ないので終わった時は結局いつもと変わらない時間だった。

マオは洗濯物を干し終えてから庭に移動し、この1ヶ月ですっかり日課の一つとなっていた軽い運動を始める。軽い運動といってもマオは記憶の中の自分、その動きを再現してみているだけ。

マオがこの運動を始めたのは、マオの記憶が少し戻った日、はやての命名により「リング記念日」と呼ばれる様になった日の翌日からだった。

マオが取り戻した記憶の中にあつた、戦う自分の姿。

マオはなぜ自分にこんな力があるのかは分からなかったが、はやてを守る為にはいつかこの力が必要になってくる。そんな確信を持っていた。

それは所詮、'なんとなく'であり、思い過ごしにほかならない可能性も高い。

だが、マオは記憶の一部を取り戻してからはやての足に纏わりつく禍々しいナニかを感じ取っていた。

そしてそのナニかは、ほんの少しずつだが、その範囲を増やし、はやての足を蝕んでいつている。

それは果たして病院に通えばどうにか出来るものなのか…自分の力を使いこなせば治せるものか…その思いがマオの不安を掻き立てる。

…が、結局の所今のマオにはそれを止める術がないのも事実。

だが、マオにはどうしようも無いと諦めるなんて事は出来ない。だからマオは自分の力を使えば、はやてを助けられるかもしれないという僅かな可能性に賭け、その腕を磨く。

「マオ、そろそろ準備しよか」

ずっとオレの鍛練を眺めていたはやてが声を掛けてきた。

ふと時計を確認すると、なるほど既に11時を回っているではないか…。

少し鍛練に熱が入りすぎたな…と考えていた時、オレはある事を思い出した。

「はやて、13×13は…?」

そう、朝の仕返しだ。突然の事にはやてはかなり狼狽えている。完全に不意打ちが決まったようだ。

拳げ句電卓を探しはじめたはやてを尻目に、オレはカウントを始める。

「5、4、3、2、1、0 …時間切れだ。答えは169…あと、10×10は100だ…」

ちよつとスッキリした気がする…。これではやてが懲りてくれれば良いんだが、恐らく明日の朝、更なる仕返しが来るのだろう…

まあ、いいか…

マオは、「時間が短すぎやく！」等と抗議の声をあげるはやてを華麗にスルーし、タオルで汗を拭い手を綺麗に洗って昼食の仕度を初める…

そして昼食後、二人は検査を受けるため、病院に向かった。

「じゃあ、検査受けて来るからちよつと待っててな」

はやてはマオに手を振りながら病室に入ってしまった。

一人残されたマオだがすっかり慣れた様子で、はやての検査が終わるまでの暇潰しにと持ってきた本を読んでいた。

「こんにちは、マオ君」

読書に没頭して暫く経った時、マオは突然声を掛けられた。

名前を呼ばれた事に気付いたマオは、読書を中断して顔を上げる。するとそこには石田先生がいた。

「こんにちは、石田先生。はやての検査は…もう終わったんですか…？」

はやての担当医がここにいるという事は、既に検査が終わっていたのかと考えたマオは問う。

「いいえ、まだよ。はやてちゃん、今日はいつもと少し違う検査をしているのよ。私はその担当じゃないからマオ君の様子を見にきたのよ」

「そうですね…」

石田先生は未だに記憶の大半が失われたままのマオの事も当然、はやて同様に心配している。

「ところでマオ君、あれから記憶の方は…どう？」

石田先生は記憶マオが戻ったとは思っていないだろうが、それでも問わなければならぬ立場にいるため、少々ぼかしぎみにだが問う。

「いや、あれ以来変化は無いです…。でも、オレにははやてがいるから…だから、大丈夫です…」

心配する石田先生に、マオは力強く答える。

はやてと一緒に暮らすうちに、マオは自分の記憶なんて戻らなくてもいいと思う様になっていった。

元より自分の過去、記憶への感心が薄かった事もあり、はやてとの生活がその僅かな感心をも埋めた今、唯このままここでははやてと二人穏やかに暮らしていければそれといいと、そうマオは考えるのだ。

「ありがとう、マオ君。あなたが来てからははやてちゃん、前よりずっと明るくなって…何より、足を治そうって前向きに考えるようになったてくれたの。本当は良くないんだろうけど、あなたがはやてちゃんと一緒にいてくれるお陰でははやてちゃんはいいい方向に変わることが出来た。本当に感謝してるわ」

石田先生は語る。マオと出会う前までのはやては、自分の足はもう治らないうと半分諦めていた事を。

だが、マオと出会い、暮らす事ではやては変わった…

『…変わったのは、はやてちゃんだけじゃないのよ、マオ君。あなたも、ちゃんと変わってきているわ…。あなたの過去がどうであれ私は、これが良いことなのだ…信じているわ…』

言葉にはせず心の中では石田先生は呟く。

「はやてが笑顔になるのなら、オレはいつまでもはやての傍にいます…いや、います…」

マオはどうにも敬語というのが喋りズラくて苦手だった。

だが、はやてがマオに目上の人には敬語を使わなければならぬと強く言い聞かせた事により、渋々ながら意識して使うよう努力をしていた。

「ふふ、お願いね。読書の邪魔しちゃってごめんなさい、私はこれで失礼するわ」

マオとの会話に満足した石田先生は自分の仕事に戻るべく、マオに

背を向けた。

「…っと、そうそう、忘れる所だったわ。はやてちゃんの今日の検査なんだけど、とつても長くなるからマ才君は先にお家に帰った方がいいかもしれないわよ?」

「わかりました…。では、今日は帰ることにします…」  
気を付けてね、と言いつつ、今度は石田先生は去っていった。

残されたマ才は、持っていた本をポケットにしまい、病院を出ることにした。

病院を出たマ才は、早速立ち止まってしまった。

普段マ才は四六時中はやてと共に行動していたために、いざ一人になった途端何をすべきか分からなくなってしまったのだ。

( 現在時刻は…午後一時…。 家事は特にやることはない…やるとしたら家で読書か…?それとも図書館に行くか…いや、ここは一ついつもより多めの運動を… )

はやて基準の…言い替えれば、はやて依存で日常生活を送っていたマ才は、核であるはやてを失った今、始めて自分の私生活を振り返る事となった。

普段自分が何をしているかを冷静に考えても、掃除や洗濯等の家事、自室又は図書館での読書、記憶を辿つての運動、この三つ以外に思い当たるものはなかった。

( いい天気だ……ん…? )

取り敢えず、天気が良かったのを理由に庭で一人稽古に励むことに決めたマ才は、一つ伸びをして空を仰ぐ。

そしてその時、妙な物を見つけた。

「 オレンジ色の…犬…?いや、狼…か…?」

強い衝撃を受けたマ才は、思わず声に出して呟いてしまっていた。

そのあまりの事に自分の目を疑い、目を越すつて再度空を見やるが、やはり雲の殆ど無い空を四足歩行の犬のような何が、かなりの速さ

で駆けている光景は変わらない。

…唯一変わっている事といえば、自分と対象との距離位だった。

(…他の人には…見えていないのか…)

その犬はそこまで高い所を駆けていた訳ではなく、平均的な視力を持つ人なら問題なく視認出来る筈、しかしその様子はない。

ならば、見慣れた光景故に特に注目する必要も無いのか…いや、それは無い筈。

マオとてこの一月、伊達に知識ばかり集めていた訳ではない。読み、聞き、見てきた全ての知識を集めても、アレは異常だと断言出来る…が、十中八九害は無いのだ。結局の所は、アレは異常だ…だからどうした…となってしまふ。

しかしマオは追うことにした。追うだけの理由が彼にはあった。

この世界の一般常識から見て異常。それは、マオの記憶の中の自分が扱う力にも言える事だった。

記憶の中のマオが飛んでいた訳ではないが、これまでの様にただ記憶を辿り、再現を試みるだけの現状を変えられるかもしれない。あわよくば、この力の正体そのものを掴めるかもしれない。

ならば追う他に無い。そう結論に達したマオは、空を駆ける犬に…出来ればいるかもしれない飼い主と接触するために、急いで後を追うのだった。

マオは全速力で走った。それはもう頗る速く、少なくとも年相応の速さでは無い。速度的にはオレンジ色の犬を上回っているのは確かだ、順調に行けば見失う事はまず無い筈だった…

しかし、結果を言えばマオはオレンジ色の犬を見失った。

理由は単純、何も無い空に行くオレンジ色の犬と違い、道行くマオの前には、人に車、建物など、行く手を阻む障害物が多すぎたのだ。見失う直前の方向だけを頼りに暫く進み続けたマオだったが、やがて速度を緩め、後にその歩みを止めた。

立ち止まったマオは周囲を見渡す。そしてそこらに広がる全ての景色が、自分のよく知る景色に似てはいるものの、全く違うものとなっている事に気付く。

「ここは…どこだ…？」

小さく呟くが、いつもの様に言葉を返す者はいない。

来た道を引き返そうにも、空を見上げ、障害を避けながらひたすらに走り続けていた為に、帰り道は疎か走っていた時間すら把握していなかった程なので、引き返したくてもそれは叶わない。

歩き回り時計を探して時間を確認すると、病院を出てから一時間以上経過している事が分かった。

全力で一時間以上走った距離なのだ、今から歩いて戻ろうにも、運良く帰れたとしても迷う時間を考えに入れば、確実に二、三時間以上かかるだろう事は明白。

しかしそれでは遅くなりすぎてしまい、はやてに心配をかけてしまう。

バスなりタクシーなりを使う、電話で連絡する等幾つか手を考えたが、はやてから渡されているお小遣いを全て家に置いてきているために、それらの手も使えない。

「……………まあ、いいか……………」

立ち尽くして考える事数分。考える事を止めるという結論に達したマオは、再び見知らぬ街を、当初の目的であるオレンジ色の犬を追い求めて歩き出す。

~~~~~

マオが病院を出る少し前、誰もいない小さな公園で、一人の女性が何かを探すように歩き回っていた。

オレンジ色の長い髪、頭には動物の耳の様な飾りを着けた女性は、一度足を止め立ち止まると、回りに人がいないかを確認してから虚

空に向けて一人喋りだした。

「……聞こえるかい？フェイト……。今、少し反応があったんだ、少し離れた所の林なんだけど……うん、アタシも今から向かうからあつちで合流しよう……」

独り言を終えた女性は空を見上げ、跳んだ。

異常な跳躍力を持つて空高く飛び上がった女性は、重力に引かれて落下する事はなく、空に浮かび続けている。

そして次の瞬間、女性は眩い光に包まれたのだが、光が止んだ後その場に女性の姿は無く、代わりに女性の髪の色と同じオレンジ色の毛並みを持つオオカミがそこにいた。

やはり落下せずに空に浮かび続けているオオカミは、目的地があるのか、迷う事無く一直線に空を駆けた……。

~~~~~

「やはり……急いで帰るべきか……」

オレンジ色の犬を見失ってからも追い続けていたマオは、目の前に広がる木々を見上げながら呟いた。

半分観光気分で進んだ末に辿り着いたこの場所は、犬を見失った商店街とは違って変わり、回りを見渡しても人の気配はまるで無く、あるのは木と畑と遠くに見える道路だけ。流石にここまで人気の無い場所に来るとは思っていなかったマオは、これ以上進むと本当に帰れるか怪しくなりそうなので引き返すべく踵を返した。その直後……ドゴオオ！！

突如、林の中からまるで木々を薙ぎ倒すかの様なただ事ならぬ音が鳴り響いた。

「……………」

再び林を見詰める事数瞬、ただならぬ気配を感じたマオは林の中へと突入した……

~~~~~

「アルフ、反応はこの先から？」

長い金の髪を二つ結びにした少女が、目の前の木々を見上げながら隣にいるオレンジ色の髪の女性、アルフに確認を取る。

「ああ、確かにこの先で間違いないよ、フェイト」

フェイトと呼ばれた少女はアルフの返答を聞き、感情乏しいその表情を更に真剣な物へと変える。

「それじゃあ行こう、アルフ」

「ああ！！」

気合い十分に二人は林の中へと入っていった。

フェイトとアルフの二人が探し、求める物。その名はジュエルシード、別名 願いを叶える宝石

ジュエルシードは元々この世界の物質ではないのだが、別の世界で発掘され、その後の運送中の事故により、このマオやはやてが暮らす世界に流れ着いてきてしまっていたのだ。

この 願いを叶える宝石 の正体は、超高密度のエネルギー結晶体であるが故に、最悪の場合次元震という次元レベルの災厄を引き起こす可能性すらある。

ただし、それなりに安定している物質なので多少の刺激で次元震が起きるといふ事は無く、故意に起こそうとでもしない限りはまず次元震は起きない。

その点を踏まえれば、一番厄介な特性は暴走し、周囲の動植物を取り込んで暴れまわる、という所だろう。

そうなってしまうと、力づくで倒し、封印する他に手は無くなってしまう…

「…見つけた」

今フェイトの目の前にあるジュエルシードは、案の定暴走し、野生

の鳥を取り込んだのか胸に青い宝石を持つ巨大な鳥の姿をしていた。暴走してしまっている以上倒すしかない。野生の鳥を取り込んでいたものの、二人に躊躇いは無かった。

「行くよ、アルフ！」

「了解だよ、フェイト！」

フェイトは飛翔し、ある程度の距離を保ち、アルフは巨鳥へと肉薄する。

「フォトンランサー、ファイア！」

アルフに気付き嘴を降り下ろそうとする巨鳥に向けてフェイトは雷の矢を放つ。矢は頭部に直撃し、バランスを崩した巨鳥の腹部にアルフの拳が入る。

抜群のコンビネーションを發揮する二人、しかしアルフの拳の直撃を受けた筈の巨鳥は怯むこと無く翼をアルフに叩き付けた。

「くあああああ！！」

「アルフ！」

防御が間に合わず吹き飛ばされたアルフにフェイトが駆け寄る。

「アルフ、平気！？」

「ああ、この位どうって事無いよ。それよりアイツ、どうもあの羽毛で衝撃を吸収しちまうみたいだね……」

アルフは起き上がりながら高らかに雄叫びを上げる巨鳥を睨み付ける。

「うん、ランサーが当たった所も傷一つ無い…アルフ、私が前に出るからサポートお願い」

「あいよ！」

体制を立て直した二人は、攻め手を変えて再び巨鳥に向かっていった。

その後、作戦は頂を奏し二人は巨鳥を追い詰める事に成功していた。アルフの打撃を無力化した羽毛も、フェイトの武器である閃光の戦斧バルディッシュの斬撃の前にはその効力を發揮出来なかった。

のだ。

「フェイト、アタシが押さえるから封印を！！」

「うん、分かった」

瞳に怒りの炎を浮かべながらも、目に見えて動きの鈍っている巨鳥を、アルフはバインドという拘束魔法を発動し完全に動きを拘束、その隙にフェイトは封印の為の準備に取り掛かった。

しかし、巨鳥は最後の力を振り絞ってアルフの拘束を突破し、木々を薙ぎ倒しながら完全に無防備なフェイトに向かって突進を仕掛けた。

これでようやく終わると確かにアルフは思ったが、決して油断した訳でも拘束を緩めた訳でも無かった。ただ単に巨鳥の体力を計り間違えたのだ。

「危ない！！フェイトー！！」

叫び、無防備なフェイトを助ける為に全力で駆けるが、巨鳥との距離の差は大きく、駆けながら再びバインドを試みるが巨鳥は意に介さずフェイトに向かっていく。

（アタシのせいだ…！アタシのバインドが甘かったから…お願いだよ…誰か…誰でもいいから…フェイトを助けて…！！）

最早万策尽き、瞳に涙を浮かべながら天に祈りを捧げるアルフ。

それでも足を止める事の無いアルフの目の前を、黒い影が通りすぎていった…

~~~~~

（手強い相手だったけど、これで終わり…）

今はアルフがバインドで動きを止めてくれるから後は私が封印するだけ…）

アルフのバインドに拘束された巨鳥を見据えながらフェイトは封印の詠唱を開始する。

しかし、詠唱の半ばに差し掛かった所で異変は起きた。

アルフの叫びが聞こえたので顔を上げると、動けない筈の巨鳥はアルフのバインドを強引に引きちぎり、こちらに向かって突進してきた。

(…そんな！？…くっ、今からじゃ防御も回避も間に合わない…！？)

強大な魔力を必要とする封印魔法こそ中断出来たものの、巨鳥の嘴はすぐそこまで来ていた。

今回かなり苦戦した強い相手だ、それに重量もかなりあるだろう…そんな相手の突進をまともに受ければただでは済まないのは明白…

(…くっ…！)

数秒後の凄惨な自分を想像してしまったフェイトは、思わず目を瞑った。

(……………？)

しかし、いくら待っても想像したような衝撃も痛みも感じない。

不思議に思ったフェイトは、恐る恐る目を開ける…

(……………！？)

目を開けたフェイトの視界に最初に飛び込んできたのは、黒髪の少年の後ろ姿だった。

先ほどまではいなかった筈の少年に驚く間もなく、少年の前方に停止している巨鳥の顔面が目に入った為に一気に緊張感を取り戻すが、同時にあることに気付く。

(よく見ると…この人があの鳥を止めてくれてるんだ…)

つまり、た、助けてくれたのかな…？)

突然の出来事の連続で頭が混乱していたフェイトだったが、ようやく現状を把握して冷静になることが出来た。

(…でも、おかしい…魔力は感じない…なのにあんな大きな鳥の突進を止めるなんて…そんなの出来る筈がない…この人は一体…)  
フェイトは横目でアルフがすぐ近くで固まっているのを確認して、

取り敢えず目の前の少年に声をかける事にしたが、それより先に少年が口を開いた。

「驚いたな…日本にはこんな大きな鳥が生息していたのか…こんなものがあるなら本に載っけていてもおかしくは無いと思うが…」

「……………へ…？」

フェイトの耳に聞こえたのは、少しでも警戒した自分が馬鹿らしく思えてしまうような台詞だった。

「いや、もしかしたら…これが噂に聞くユーマという奴なのかもしれないな…」

いまだに少年はとんちんかんな事を言っている。

もつとも、警戒を解いたフェイトにとって目の前の少年は既に自分を助けてくれた人というプラスの認識になっていたので、多少の場違いな言葉は気にならなくなっていた。

「……………あの…」

「ん？ああ、そうだ…大丈夫か…？」

フェイトが声をかけた事でようやくその存在を思い出した少年は、振り返ってフェイトの安否を確認する。

ちゃんとフェイトを助ける目的で割り込んだようだ。

「はい、お陰様で私は平気です、助けてくれてありがとうございます…その…君は大丈夫…？」

「ああ、体は平気だが…こんな大きな鳥は見たこと無くてな…少し驚いている所だ…」

それに…この鳥は怯えているのか…さっきからまるで動く様子がない…」

日光が反射して少年の顔はよく見えないが、巨鳥を見ると確かにその瞳には恐怖が浮かび上がっていた。

しかし、これは都合がいい。今なら簡単に封印が可能だろう…

「この鳥は訳ありだから…知らないのも無理は無いよ…」

『…アルフ…もう一度バインドをお願い』

『……………』  
フェイトは少年を納得させながらアルフに念話という一種のテレパシーを送るが、アルフの反応がない。

『…？…アルフ…？』

『あつ、ああ、バインドだね、今度はしくじらないよ！！』

二度目でようやく反応したアルフは、早速バインドを巨鳥へとかけたが巨鳥の抵抗は一切無かった。

「今からあの鳥を封印する。君は少し離れていて…」

「封印…？ まあ、いいか…」

少年は聞き慣れない言葉に疑問符を浮かべたが、大人しくフェイトの言葉にしたがった。

「ジュエルシード封印…完了…」

その後封印は滞りなく完了し、少年になんて説明するか…や、改めてお礼を言わないと…と考えていたフェイトだったが、突然自分達にジュエルシード回収の命を下している母親から念話が届いた。

『…フェイト、アルフ…今すぐ帰って来なさい…その少年とこれ以上関わることは許さないわ…いいわね、今すぐもどるのよ…！』

急な帰還命令。いつもなら直ぐに次のジュエルシードを探しに行けと言う筈なのに、どうも様子がおかしい…

「…ところで…聞きたい事がいくつかあるんだが…」

当然だが少年が質問をしようとする。こちらでも聞きたい事は沢山ある、それに個人的にももつと話をしてみたい…

(けど、母さんの命令は絶対だから…)

「ごめん、直ぐに行かなくちゃ行けないんだ…さっきは本当にありがとう。お話は、次に会った時に…」

もう関わるなど言われている以上次はない。それでも気休めの台詞を言ってしまうのは自分が期待しているからなのか…

(結局、顔も名前も分からなかった…だけどあの後ろ姿は忘れない…きつと…ううん、絶対に…！)

飛び上がったフェイトとアルフは、振り返る事無く飛び去った。

~~~~~

一人残されたマオは、しばらく金色の少女とオレンジの女性が飛び去っていった空を眺めていた。

異様な気配を感じて林に入り、巨鳥から少女を助け、少女は巨鳥を封印した、そこまでは良かった。しかし、さあ話を聞かせて貰いましょうという所で少女は去って行ってしまった。

自分で少しは仮説を立てることは出来る。

恐らくあのオレンジの髪の女性が、ずっと追っていた犬なのだろう…とか、少女が回収していた青い宝石が鳥を巨大化させていたのだろうか…

空を飛び回っているくらいだから姿形位どうとでもなりそうなもの…しかし、知りたかったのはそこでは無い。その力は何なのかが知りたかったのだ…

自分の力の正体を知るチャンスを失ったマオの落胆は大きい…

「まあ、いいか…」

過ぎたことは過ぎたことと割り切ったマオは、空を飛ぶ少女からヒントを得て、一番高い木のとっぺんに上り町を見渡せば、もしかしたら大病院位なら見付けられるのでは？と考え、実行に移した。

「見つけた…」

元々この林が高い所あった事もありかなりの範囲を見渡すことが出来、遠くに小さくだが大病院を見付けることが出来た。

木から降りたマオは一度林を見渡し、少女にもう一度出会える事を願ってから暗くならないうちに帰れるよう全力で走った…

~~~~~

「…ねえアルフ…どうして母さんはあんなに焦ってたのかな…？」  
フェイトは母の待つ部屋へ向かう途中、黒髪の少年の後ろ姿を思いながら隣を歩くアルフに問う。

「…フェイト…アタシはなんとなく分かるよ…なんていうか、野性の勘みたいなものだから上手く言えないんだけど…あの子供は…何か違うっていうか…なんていうか…」

アルフは上手く言えないと言うが、ずっと共に過ごしてきたフェイトにはアルフの中に明確な答えが出ている事がよく分かった。そして同時に、少なからず少年に惹かれている自分を気遣って言葉を選んでいる事も…

「アルフ、隠さないでいいよ、アルフの感じたままを正直に言っただけ欲しい…」

フェイトは一度立ち止まり、アルフの目を見て訴えかける。そんなフェイトに隠し事を出来るアルフではなく、アルフはフェイトには悪い思いつつも正直に言うことにした…

「…気を悪くしたらゴメンよ…？アタシは…きっとあの巨鳥もだけど…恐かったんだよ…フェイトを助けたあの男の子が…。正直逃げ出したかった…けど逃げられない何かがあって…結局動けなくなつて…、蛇に睨まれたカエルの気持ちってのがよく解つたよ…」

~~~~~

「…母さん…ただいま帰りました…」

「今日はもういいわ、フェイト。下がって休みなさい」

フェイトの母プレシアは、入室したフェイトを見もせず冷たく告げる。

娘への愛情の欠片も感じられない対応だが、これでさえ普段と比べれば格段に優しい対応と言えた。

母が出ていけと言っただ、ここで退室すれば母の怒りを買うことはまず無いだろう。が、フェイトには、例え母の怒りを買って虐待紛いの仕打ちを受けようとも、どうしても聞きたい事があった。

「あの…母さん、さっきの男の子は…一体…」
あらんかぎりの勇気を振り絞って紡いだ言葉。怒鳴られ、叩かれる事を覚悟していたが、そうはならなかった。

「あの少年はただの子供…最初はそう思っていたわ…。けれども違った。詳しくは分からないわ、ただ敵に回してはいけない存在という事は分かった…それだけよ…。分かったらとっと出ておいきなさい」

フェイトを睨み付けるプレシア。その瞳には拒絶の色がはっきりと浮かび上がっていた。

「おやすみなさい…母さん…」

母はこれ以上何も語らないと判断したフェイトは、大人しく退室する事にした…

（結局分らない事だらけ…アルフが本能的に恐れ、ジュエルシードと一体化した事で強大な力を入れた筈の巨鳥が怯え、あの母さんに敵に回してはいけないと言わせた黒髪の男の子…）

「もう忘れよう…？フェイト…。確かにあの男の子はフェイトを助けてくれた恩人だけどき、プレシアがあそこまで言うんだ、関わらないに越したことは無いよ」

アルフはフェイトの事を思い、納得いかない様子のフェイトに敢えて諭す様な言葉をかける。

「…そう、だよね…。…うん、もうこの件は気にしない事にする。心配かけてゴメンね…アルフ…」

フェイトは、忘れる、とは言わなかった。そこにはフェイト自身が気付かないとある感情が見え隠れしている。

しかしフェイトは、『私にはやるべき事がある。そして、そこに私情を持ち込む訳にはいかないんだ…』と自分に言い聞かせ、その想いを『私を助けてくれた優しい男の子がいた』という思い出しにして、

自分の心の奥底にしまいこんだのだった…

第5話〜起動は必然〜

それは、マオがいつものように検査中のはやてを待ちながら読書に没頭していた時の事だった。

はやての病室から一人出てきた石田医師は、いつも同じ場所で読書をしているマオを迷わず見つけて歩み寄り、声をかける。

「こんにちは、マオ君。ちょっといいかな？」

「こんにちは、石田先生…。なんででしょうか…」

マオは読書を中断して顔を上げ、挨拶を返す。

いつもならこの後、石田医師がマオの体調の心配をし、マオはそれに問題無しと答える。それはこの数ヶ月間たびたび行われた問答。

しかし、石田医師がマオに告げた言葉は、過去前例無きものだった…

「明日はやてちゃんのお誕生日でしょ？はやてちゃんとマオ君がよければいいんだけど、三人でお食事にいきましょって伝えてくれないかしら…？」

「…はい…分かりました…はやてもきつと喜びます…」

マオは内心かなり動揺していたが表情に出さないで、石田医師はそれに気付かず、返事は明日の検診の時でもいい、はやては後三十分程で出てくると言い残して去っていった…

誕生日。それは年に一度の大イベント。一年の成長を祝い、ケーキやプレゼント等、子供心を撥る様々な物に囲まれて大切な人と過ごす日…子供にとってそうあるべき日…

はやてにとつてのその日が翌日にある。だというのに自分はプレゼントの一つも用意していない…。

マオは今、相当焦っていた…

（なんとしても明日までにプレゼントを用意しなければ…

しかし、プレゼントか…一体何を渡せばいいんだろうか…、祝いの品、つまりはやてが喜ぶ物でなくてはなるまい…。

「喜ぶ＝笑顔になる」と考えて良い筈だからな、はやてが笑顔の時はどんな時かを考えれば…

…ん？…おかしい。オレの記憶の中のはやては、いつも笑顔でいる。常に喜んでいるのか？…やはりオレはまだまだ喜びについての理解が足りないらしい…。

…くっ、これは避けたかったが誰かに聞いてみるしか無いか…)

~~~~~

と言っても、マオは誰に聞けば良いのか分からなかったので、病院内を少し歩いて見つけた、はやてと同一年頃で金髪の、見るからに気の強そうな少女に聞いてみる事にした。

「おい、おま…いや…君、少し聞きたいことがあるんだが」

最初から、お前、は不味いと思ひ、少し軟らかくして声を掛けたつもりだったが…。

「いきなり、おい、とは失礼ね、あんた誰よ！」

…どうやら足りなかったらしい。しかも想像どおり少女は気が強いようだ。

「…すまない、礼儀がなつて無かったようだ。オレの名はマオ、八神マオだ…」

取り敢えずマオは謝った。それが最善だった事は直ぐに結果として出た。

「まあ、今回は大目に見て上げるわ。私の名前はアリサ？ バニングよ、アリサでいいわ」

マオが謝ると少女は少し機嫌を良くしたらしく、自分の名を名乗った。

「分かった…アリサか、いい名前だな…」

マオは先程のようにはなるまいと考え、そして素直にそう思ったこともあり、名前を褒めた。

「なっ、／＼なに言ってるのよ！そっ、それより何か用があるんでしょ！聞いて上げるからさっさと言いなさいよ！」

顔を背けられてしまったが、一体どうしたのか…もしかしたら怒らせたのだろうか。マオは考えるが【怒り】はまだ解らないので何とも言えない…ともあれ話は聞いてくれるらしい。

（ まあ、いいか… ）

「じゃあ聞くが、大切な人に渡す誕生日プレゼントを何にすればいいか分からなくて困っているんだ…。年はアリサと同じ位なんだが…一体何をあげたらいいのだろうか…？」

アリサは背けていた顔を戻し、真剣に考えてくれた。

「うーん、私の個人的な意見を言えば、綺麗な物とか…何か形に残る物がいいと思うな。けどまあ、一番大事なのは渡す人の気持ちだから余り深く考えすぎない方がいいわよ？」

（ なるほど。綺麗で、形に残る物で、大事なのは渡す人の気持ち。つまりオレの気持ちか…。 うん、何を渡せばいいのか全然分からん… ）

「アリサ、せっかくだ、綺麗で形に残る物を渡そうと思うのだが、オレにはそれがなんなのか全然分からない。だから、出来ればいいんだが一緒に選んでくれないか…？」

マオは自分で考えても答えは出ないという結論に達し、アリサに助力を頼んだ。

「まあ、乗りかかった船だしね。いいわ、丁度お見舞いも終わって帰る所だったから、マオに付き合っただけあげる」

（ 助かった。アリサがいればいい物を選べるだろう… ）

「ありがとう、アリサ…」

その後、一度はやての様子を見に行ったマオは、はやてにこれから出掛ける事を伝えて、そのままアリサとデパートに買い物に出掛けた。

「あつ、これなんていいんじゃない？」

それは、一般的に見てもとてもかわいいらしいだろうペンダント。

だが、

「無理だ。オレはこんなに出せるほど金を持ってはいない……」  
値段を見ると数字が5桁。9歳で、しかも居候のこの身では、  
とてもそんな大金の持ち合わせがある筈も無く、マオは別のを探す  
事にした。

そして、しばらく何にするかを迷いながら選んでいて、少しアリ  
サと離れていた時……「キャツ!？」

突然、黒いスーツの男達にアリサがさらわれていつてしまった。

「アリサ……!？」

急な事だった為に後を追ったものの追いつく事が出来ず、男達はア  
リサをデパートの外に用意していた運送用トラックに連れ込んだ。  
なんとか追いつく事が出来たマオは、トラックの荷台の上にしがみ  
ついて落ちないように俯せになり、はやてに渡されていた携帯電話  
で警察に連絡した。

トラックはしばらく走った後、廃工場のような場所に入っていた。  
そして、停車したトラックの中から男達に連れられてアリサが出  
てきた。

「ちよつとあんた達、いつたい何なのよ!!」

こんな事してただで済むと思ってるの!？」

どうやらアリサは無事な様子で、黒スーツの男達に啖呵を切ってい  
るが、その声は震えている。

「うるせえぞ糞ガキが!!殺されたく無かったら黙ってやがれ!!」

「キャツ……!!」

黒スーツの男の一人が痺れを切らしてアリサの頬を叩いた。余程恐  
かったのか、アリサは以降完全に俯いてしまった。

マオはこのまま大人しく警察が来るのを待とうかと考えていたが  
……やめた。

あの気が強く、そして、優しさを持ち合わせたアリサが、知らない  
男達に対する恐怖に震え、想像してしまう未来に怯え、暴行を受け

声も出せずに……泣いていた…。

それを…アリサの涙を見てしまった次の瞬間、マオはトラックから飛び降り、アリサを掴まえていた男を蹴り飛ばしていた。

「大丈夫か…？アリサ…」

そしてマオは男達からアリサを庇うように立った。

「…マオ…！？あなた…なんで…！？」

アリサはまだ恐怖で上手く喋れないようだが、予期せぬマオの登場にただただ戸惑っていた。

「何しやがんだこのガキ！！」

マオは前方から真っ直ぐに殴り掛かってくる男の腕を掴んで投げ飛ばした。

黒スーツはあと四人。しかし、動きを見ても個人個人の實力は高くはない事は直ぐに分かり、早く片付けるべく、マオが一步踏み出そうとした時…

ガウン！！

鳴り響いた銃声と共にマオは右腕から軽い痛みを感じ、その箇所を抑え方膝をついた。血が流れる感覚からしてどうやら掠ったようだった…。

「クソ餓鬼が、調子乗ってんじゃねえぞ！」

どうやら伏兵がいたらしく、銃口から煙を上げる銃をこちらに向け、男が柱の陰から出てきた。

男は怒り、怒鳴りながら銃口をマオに向けたまま離さない。マオとアリサにとってまさに絶対絶命の状況。アリサは銃とマオから流れる血を見て真っ青になり、今にも気絶してしまいそうな様子だ。

このままでは不味い…自分の浅はかな行動のためにアリサを更に傷付けてしまいかねない…。そう考えたマオは、この窮地を脱してアリサを救うため、自分の、力、を使う覚悟を…静かに決めた。

「ガキ、手を上げな」

「分かった…」

マオは上手く動かない右腕はそのままに、黒スーツの男の要求通

りゆつくりと左腕を上げる。その途中、上げる腕を肩と水平の高さ  
で止め、手を前に突出し、指を弾く。  
パチンツ！という指鳴りの音が鳴り響いた後、マオとアリサ以外に  
動く者はいなくなっていた…

その後は未だに怯えるアリサを安心させる為に、動けない、男達  
を気絶させ、奴等のトラックに積んであった縄で縛り付けた。  
その後しばらくしてやって来た警察に黒スーツの男達を引き渡し、

警察には「通りがかりの正義の味方が急にやって来て気絶させて  
いったので、縄で縛って置いた」と説明した。到底信じがたい話で  
はあるが、マオの様な少年が一人で悪党を懲らしめましたというよ  
りは現実味があったのだろう…警察はどうにか納得してくれた。

「アリサ、もう大丈夫だ…。それにしてもアリサが中々のお嬢  
様だったとはな…。正直驚いたよ…。それに加えて容姿がいいのだ  
から狙われるのも仕方ないな…」

元氣のないアリサを励ますため、少しどうでもいい事を言ってみ  
るマオ。

「…助けてくれて…ありがとう…」

ようやくアリサは少し反応した。あと一押しで元に帰りそうな感  
じだったので、マオは頭を振り絞って言葉を捻出する。

「アリサはかわいいいらしいからな、また拐われない様気をつけ  
るよ…」

「ちよつと！！らしいってなによ！！らしいって！！」

顔に生氣が戻り、ようやくいつものアリサに戻ってくれた。少し  
怒鳴るも直ぐに冷静になり、アリサを元氣付けようというマオの意  
図を理解したのか、マオを責める事を止めて大人しくなった。

「でも、拐われたら、またマオが助けてくれるんでしよ…？／／」  
アリサは恥ずかしさを堪えながら上目遣いで訪ねる。

「いや、それは保障出来ないな…」

…というか、またさらわれる気か？ともマオは思ったが、そこは口に出さないで留めた。

「そこは嘘でも助けるって言いなさいよ…バカ…」

何故バカ呼ばわりされたのかマオには分からなかったが、とりあえずアリサが元気になった様なので良しとする事にした。

右腕の治療を終え、警察から解放された頃には辺りは既に暗くなり始めていた。なのでマオは家に帰ろうとしたが、アリサがどうしてもお礼しなければ気が済まないと言ってきたのでそれを承諾した。

はやてには既に遅くなると伝えてあった為、心残りだったプレゼント選びの続きを頼む事にしたマオは、アリサの家の車に乗り再びデパートに向かった。

そしてマオは、はやてへのプレゼントとしてアリサが選んだ白く透明なガラス玉の様な物が付いたシンプルなネックレスを買った。少し高かったのだが、足りない分はお礼との事でアリサが出してくれたので何とかなった。

店を出てから自分も買う物があるというアリサを待つ事数分、アリサは思ったより早く出てきた。

「はいっ、これはマオの分よ」

突然アリサに渡されたのは、プレゼント用に買った物の色違い、白の代わりに黒く透明なガラス玉の様な物が付いた物らしかった。

「こっこののはお揃いの物だとなお嬉しいものなのよ」

アリサは胸を張って誇らしげに言う。

「しかしこれでは…オレが貰いすぎになってしまうな…」

流石のマオも、選んでもらい、足りない分をだしてもらい、さらにこれでは何か悪い気がした。

「埋め合わせはまた今度してくれればいいわ。それより、家まで送っていつて上げるからさっさと乗りなさい！」

照れを隠しながら言うアリサのまた今度という言葉。そこに込め

られた、また会いましょう、という意味を理解したマオは、薄く笑った。

「ああ、わかった。また今度…必ず埋め合わせをさせて貰うよ…」  
マオの笑みを見たアリサは、真っ赤になった顔を隠すように急いで車に乗りこんだ…

その後アリサに家まで送って貰い、別れを済ませたマオは、はやてへのプレゼントを手によやくはやての待つ我が家に帰る事が出来た…。

マオが帰ってからののはやては、ずっと機嫌が悪かった。やはり、心配をかけたからなのだろうか？

現在時刻は午後の七時。警察とのゴタゴタで時間を食ってしまったのが大きかったか。とはいえ食事中にそこまで露骨に不機嫌さをだされるのも困りものだ。

だが、マオにはこの状況を打破出来る手立てがある。

今こそ、そのカードを切る時と、マオは意を決して口を開いた…

「はやて、今日石田先生が明日三人で食事に行こうと言ってくれていたぞ…」

その後ののはやての上機嫌ぶりは凄まじく、先程までの不機嫌さがまるで嘘の様に思える程だった。

更に、食後にリンゴまでだしてくれたのだから言う事は無い…。

「明日楽しみやね」

夕食の後、いつものように二人は風呂に入り、マオがはやてのスベスベな背中を洗っている時、はやては後ろにいるマオに話しかける。

「そうなのか…？スマナイ、オレには…よく分からない…」

「そっか、マオは分からないんやっただな…。  
でも分からへん？こっ、早く明日にならないかな…って感じ」

【喜怒哀楽】の内、【喜】の感情しか自分の感情として理解出来ないマオにとって、はやての言う【楽しみ】というのがどうにも分からなかった。

【喜】以外の感情もなんとなくは分かる。けれども、それを自分の感情としては解らない。それが今のマオだった。

「はやくあしたにならないかな…」

棒読み。その後、はやてはのぼせる寸前まで説明を試みるも、やはりマオはまだ解らないようだった。

時刻は既に夜の11時40分。はやてはドキドキしていても寝付けないらしい。どうもそわそわしっぱなしだった。

「早く寝ないと…明日もたないぞ…」

マオは、はやてに早く寝るよう促すと、むしろ自分が眠いので早く寝る為にはやてを連れてはやての部屋に移動した。

マオははやての部屋に入ると同時に妙な違和感を感じた。どこかに発信源がある筈と考え、部屋を見渡すも…怪しい本がある位だった。マオは念の為にはやての部屋のタンスに仕舞われた、元々身に着けていた普通ではない服装の一つである黒いマントを側に置いておく事にした。

そのマントの使い方は記憶の中にある。一見ただの布だが、これだけで刃物や光のようなものを防げる記憶の中の自分も重宝している程の代物なのだ。有事の際に助けになってくれる可能性は高い。

「マオ、それどうするん？」

当然はやては不思議に思い質問する。まあ、いきなりマントを出されたら誰でも気になるというもの…

「気にするな、それより早く寝よう…」

はやては深く考える事はなく、マオに言われるまま気にしない事にした。

( …………… なんなんだあの怪しすぎる本は……。まず表紙からして変だ、さらに鎖まで巻いてあるし…… 明らかにはやての趣味ではないだろう…… )

「 はやて……あの本は……一体なんなんだ……? 」

やはり気になって眠れないので、マオは結局はやてに聞く事にした。

はやての話によると、どうやらあの本は物心付いた時にはあつたらしい……

話を聞き終わってもなお怪しい本。しかし、ずっとあつて害はなかったのだ……今更どうこうしなくてもいいだろうとマオは結論を出した。

その後、はやても眠れなかつたらしいので、しばらく話をしていたが、時計を見ると既に11時59分。

いい加減本当に寝ないといけなと思った時、部屋に異変が起きた……例の怪しい本が、妖しく光出したのだ。

『 闇の書の起動を確認しました 』

何処からともなく声が聞こえ、本は光をよりいつそう強めた……

その後、強い光が収まると……そこには見知らぬ人間が四人、膝をついて佇んでいた。

## 第6話〜怒りは必然〜

0:00

マオとはやてが寝ようとした時、突然はやての部屋にあつた怪しい本が光を発し出した。

その後、本は光を発しながら浮遊し、部屋の中央付近で止まった。

「 一体…なんなんだ…」

空中で止まった本は、まるで心臓の様な鼓動を始めたかと思えば、巻き付いていた鎖が外れ、一人でに開き、そのページを進めていく。

マオはその奇妙な光景に啞然としてしまい、その後ろでマオに庇われる形になっているはやては、その背にしがみつき微かに震えている。

そして、ページが終わり、本は十字架のついた表紙を二人に向けている。

『封印を解除します』

その声と共に本は更に光を強くした。そして…

『起動』

強い光を発した後、本の光は収まり、部屋の中にはマオもはやても、まるで見知らぬ四人が方膝をついて佇んでいた。

中央には、ピンクのポニーテールの女性、そして赤い髪の少女。両横には、金髪の女性と白髪で筋肉質な男。 四人は皆、頭（こぶ）を垂れていてマオとはやてを見てはいない。

すると、中央のピンクの髪をポニーテールにしている女性が喋りだした。

「闇の書の起動を確認しました。 我らは闇の書の守護騎士、ヴォルケンリッター。 主、なんなりとご命令を…」

四人を前にマオは警戒をしつつ、冷静に思考を巡らせる。

（ 守護騎士に主…か。 本の光から現れた四人、そして本ははやての所有物…となれば主とは恐らくはやての事だろう…。そして守護騎士、つまりあの四人は、主であるはやてを守る何か、という事になるか…）

マオは啞然としたのも一瞬、すぐに現状の整理の為に頭を働かせる。ピンク髪の言葉や態度、そして何より四人から一切の戦意や殺意が感じ取れない事を踏まえて一応は敵ではないと判断した。

だが、マオは自分が考える事に集中しすぎて、ある事を見落としてしまっていた。

「マオ…これは一体…なんやの…？」

そう、はやてだ。マオと違い、はやてには今何が起きているのか全く分からず、ただマオの背中にしがみついて震え続けていた。

その事に気付いたマオは、ひとまずあの四人は敵では無いらしい事をはやてに伝え、安心させるべく後ろを振り返ろうとした。

しかし、首を動かしたと同時に、鋭い殺気と共にマオの頭上目掛けて剣が振り落ろされた。

「貴様、何者だ！我が主に何をするつもりだ！！」

マオは殺気を感じた瞬間、反射的に近くに置かれたマントを手に取り剣を受け止めたが、あまりに咄嗟の事だったので幸い切り裂かれる事こそ無かったものの、防いだ腕が痺れる程のダメージを負ってしまった。

「いきなり…なにをするんだ…」

マオに攻撃を仕掛けたのは、中央にいたピンク髪の女性だった。

その攻撃の躊躇いの無さ、鋭い太刀筋、等から考えてかなりの場数を踏んできている事が容易に分かった。

更にピンク髪の女性の後ろでは、他の三人も立ち上がり、その全員がマオを睨んでいる。

ピンク髪の女性が強い事は既に分かった事だが、恐らく、あの三人

もこのピンクと同じ程度の実力を持っているのだろうと判断したマオは自身の劣勢を悟る。

現時点で、はやてを守ろうとする姿勢から突如現れた四人がはやてに害成す者では無い事は確定した。

なので当然マオは彼等を敵だとは思っていない。しかし、問題なのはマオがどう判断しようと、四人がマオを敵と判断してしまえば意味が無いという所。

「 待て、オレは敵じゃない…! 」

どうにかマオは自分が敵では無い事を伝えようと試みるも…

「 問答無用…! 」

ピンク髪の女性は敵意を剥き出しにしたままキツパリといいはなつ。後ろにはやてががいるからか四人が攻撃を仕掛ける様子は無いが、話し合いに応じてくれる雰囲気でも無い。

マオははやてが説明をすれば何とかなるとも考えるが、はやては剣を見てさらに怯えてしまった様子なので説明なんてとても出来ないだろう。

それに元々はやてに話しかける余裕すら無いのが事実。

( どうしたのか… )

「 もう一度聞く、貴様は何者だ! 」

マオに剣を向けたままピンク髪の女性が問う。はやてがマオの背後にいる事が余程大きいのか、先程よりは言葉を交わす気があるらしい。マオにとって身の潔白を証明するまたと無いチャンスが訪れた。

「 まず、自分から名乗るのが…礼儀なんじゃないか…? 」

しかし、マオはここに来て相手を挑発する様な態度を取る。

普段のマオなら有り得ない様な態度。やはりマオにも四人に対して何か思う所があるらしく、はやてを怯えさせる四人を前にして、何か胸がモヤモヤするような、自分でもよく分からない感覚を感じていた。

「 私は誇り高きベルカの騎士、烈火の将、シグナムだ! 」

自らをシグナムと名乗ったピンク髪の女性は、マオにも名乗れと言いたげに一層強く睨む。

「マオだ…」

名乗ったマオは、自分が話し合いを拒んだ為に戦闘になるだろう事を覚悟し、しかしここで戦闘になるのは不味いと考えて素早くはやてを抱え、ひとまず逃げることにした。

マオは迷わず窓から飛び出て、夜の町をはやてを抱えながら跳んだ。そして屋根から屋根へと移動しながら、驚きつつも少し表情を柔らかくしたはやてに取り敢えずあの四人ははやての味方だろう事、そして四人が自分を敵と認識している事、更にこれからあの四人と戦う事になるだろうという現状を簡単に説明した。

「すまない、はやて…話し合いという手があったにも関わらず…オレは…」

「気にせんでええよ…？マオ…。別に戦ったってええ。でも、お互い怪我だけはせーへんよう気を付けてな？」

はやてはマオが自分を第一に考えてくれているという事を十二分に理解していた。

そのマオが考えて決めた事を責めるなんて、まして否定するなんて言う考え、最早はやての頭の中には思い浮かびすらしない。

それは、疑いの感情が欠落してしまったのではないかと思える程。互いが互いを支えあい、共に過ごして来た二人の絆はそれほどまでに強いものだった…

暫くすると、間違いなく四人の内の誰かの仕業だろうが、マオとはやての二人は、何か結界の様な空間に閉じ込められた。

「ここから…動くなよ…？」

マオは、はやてに自身が身に付けていたマントを羽織わせ、四人が来るのを待つ事にした。

はやてが事情を理解している今、この後話し合いで誤解を解く事は簡単に出来る筈だ。

だが、今の所マオにはそれをする気が全く起きないのだ。それが何故なのか…マオは考えてみるが、答えが出る前にあの四人現れた…  
「おのれ賊め！！我らヴォルケンリッターから逃げられると思うな！！」

四人がやってきたのを確認し、マオは静かに構えをとり、自身の戦意を示した…

~~~~~

私はシャルルの張った結界の中で主を連れ去った少年　マオを見つけた。

「おのれ賊め！！我らヴォルケンリッターから逃げられると思うな！！」

主は先程私の刃を防いだ不思議な布を羽織わされている。一刻も早くお助けしなければならぬというのに、マオ少年は我らの前に立ち塞がる。

「来い…」

…どうやらマオは我らと戦う気らしい。たった一人で我らを相手にしようなど、舐められた物だ…と言いたい所だが、幼い身で我らを前に物怖じしないその態度には、敵ながらに好感が持てる…

「行くぞ！！」

それでも、例え相手が子供であろうとも、主に害成す賊である限り容赦する訳にはいかない。

私は強く踏み込み、横薙に一閃剣を振るう。

手加減をしたつもりは無いが、その一太刀は容易に躲かれてしまった。

(…面白い…！！)

ならばと、私はさらに連続で切り付けるが、その全てがごとごとく躲かれてしまう。

「これでも食らえ！　シュワルベフリーゲン！」

流石に掠りもしないとは思わなく、私はヴィータの攻撃に合わせて一時離脱した。

ヴィータの放った鉄球が三つマオに迫ったが、マオはそれを避けるでも無く迎撃するでも無く、ただ手を前に突き出し指を弾いた。すると、途端にマオへ向かっていた筈の鉄球は停止し、落下していった。

「…どうやら相当の使い手の様だな…ヴィータ、ザフィーラ、油断するなよ」

これまでの様子から判断しても、どうやら相手を舐めていたのはこちら側だったと認めざるを得ない…。

想像以上の実力を持つ得体の知れない少年を見据え、私は再び剣を構えた

~~~~~

マオは騎士達の攻撃に対し、回避と防御に専念した。

理由は、彼等の実力を知るため、そして実戦の雰囲気慣れるため等あるが、何よりも騎士達の攻撃が凄まじいために、攻めようにも攻められずにいるのだ。

騎士達の実力は相当高い。それぞれが強い意思を持ち、主であるはやてをマオから救うべくして武器を振るう。

しかし、だからこそ…

「何故、お前達はよく状況を観察しようとしなかった？」

マオは許せなかった…

「なに!?!」

一時でもはやての笑顔を奪った騎士達が…

「お前達が最初に現われた時、はやては…お前達の主は、オレの背後で怯えていた…」

「…!?!」

マオは少し俯いているので誰もその表情を伺う事は出来ない。

騎士達はマオの言葉を聞き戸惑い、攻撃の手を止めた…

(…頭に記憶が流れてくる… 笑顔のたえない村人達が…活気に満ち溢れた村々が… 恐怖に…絶望に塗りつぶされて行く…)

「お前達は、はよてから笑顔を奪った…」

(オレは…オレ達は…守れなかった…。オレに…力が無かったから…村も…人も…何もかも…！)

…だが…今は違う…！ 今のオレには…力がある…！ 守る為の力が…！ だから、今度こそ…！！)

「オレは、はよての笑顔を奪う者を…絶対に許さない…！！」

~~~~~

あれは不味い。そう直感したシグナムは仲間に指示をとばす。

「ヴィータ！ザファイラ！一度距離をとるぞ」

顔を上げたマオの目は、緋く、光っていた…

変化は瞳以外にも現れた。

(それになんなのだあの魔力量は…桁が違いすぎる！)

闇の書の騎士として、数多くの戦場を駆け抜けてきたシグナムでさえ戦慄する程の圧倒的魔力。

目にするだけで戦意を根こそぎ奪い取るかのような絶対的畏怖。

マオが無意識の内にはよてを避けている為にはよては何も感じない。ただマオの勝利を願い祈っている。

しかし、シグナム達四人はマオから溢れ出す魔力だけで心が折れそうになっていた。

「ノーザンストライク…」

言葉と同時にマオの回りに現れた赤黒い塊がシグナム達に向かって飛んでいった。

「我らは誇り高きベルカの騎士…！！この…程度！」

シグナム達は硬直する体に鞭打ち、誇りと忠義で心を支えて飛来するそれを躲し、破壊していった。

しかし、その向かって来ていた攻撃自体は思ったよりも強い攻撃では無く、速さこそあるものの所詮それだけのものだった。

こんなものでは脅威になりはしない…しかし、これで終わる筈は無いとシグナム再びマオを見る。するとマオは左腕を前に突出し、その指を弾いた。

「しまっ!?!」

先程ヴィータの鉄球を停止させた時と同じ動作。もしそれが人体にも有効な技だとしたら…そう仮定を立てるも回避の術はなく、瞬間にシグナムは仲間共々動けなくなってしまった。

(そうか、先程の攻撃は私達を一か所に集める為の罠…。完全に気圧されてしまった…。一瞬見せたあの赤い目も、桁違いな魔力量も今は感じ無い。

私は確かに彼を強大な敵として認識した筈だった…だが心のどこかでは、どんな相手であろうと我ら四人が負ける筈が無いと慢心してしまっていたのかもしれない…)

最早動く事も魔法を使う事もできないが、意識だけはしっかりとあるシグナムは、マオを見る。するとマオは、先程よりも強力な攻撃を放ち決着を付けようとしている所だった。

(…我らは負けたのだ、文句は言うまい…)

「ノーザンインパクト…」

シグナムが潔く敗北を受け入れたと同時に、マオの止めの攻撃は放たれた。

先程の攻撃とは違い、一点集中の蒼い砲撃といった感じの攻撃が迫る。

(…これまでか…主、申し訳ありません…)

シグナムが迫りくる蒼い光を眺めていた時…

「シグナム!!」

敗北を覚悟したシグナムの前に騎士の一人であるシャマルが飛び込んできた。シャマルは障壁をはって防ぐが、長くは保たないだろう事が障壁に走るひびから見て取れた。

ホツと胸を撫で下ろす。

「主！一体どういう事なのですか！？」

（どういう事だ？主はこの少年にさらわれていた筈では無いのか…？）

戦う前からシグナム達は敵では無いだろう事が分かっていたマオとはやてとは違い、シグナムはマオが敵だと疑わずに、ひたすら主であるはやてを救う為に剣を振るっていたのだ。戸惑うのも領ける…不退転の覚悟を決めた直後に争う事無く終わりを迎えた戦い。最早シグナムにはなにがなんだかさっぱり分からなくなっていた…

「まあ、立ち話もなんだから、お家に帰って話そ？マオ、他の三人は大丈夫なんやる？」

マントを羽織っているものの、少し肌寒さを覚えたはやては家に帰ろうと主張する。同時に今は見当たらない三人の身を案じるが、マオが傷付ける筈は無いと分かっているので焦りは無い。

（そうだ！ヴィータ、ザフィーラ、シャマルは！？）

シグナムは、決して忘れていた訳ではないが、分からない事が多すぎて思考から外れてしまっていた仲間が三人いる。シグナムは当然その三人も心配だという気持ちは強くあるのだが、同時に、自分の仲間を…主にとってはただの道具に過ぎない筈の守護騎士を気遣ってくれている主に大きな衝撃を受けていた。

「大丈夫だ…。動きを止めただけだからな、もう三人共動ける筈だ…」

マオは事も無しにさらりと告げる。

「そっか、じゃあ皆でお家に帰ろ…？」

マオの言葉通り、程なくしてシグナムの仲間であるヴィータ、シャマル、ザフィーラの三人が、シグナムと同じ驚きを隠せていない表情で集まった。それを確認したはやては全員に一度家に帰るよう促す。

（…本当に、一体なにがどうなっているというのだ？ あの、マオ

という少年は敵だったのでは無かったのか？)

様々な疑問がシグナムや騎士達の頭の中で渦を巻いていたが、主を含め全員無事で、しかも無傷という現状がある。マオがその気なら誰も助からなかった筈だというのに、だ。

シグナムはいまだにマオへの警戒は解かないものの、主の命と言う事もあり、仲間と共にはやての自宅で説明を受ける事を了承した…

はやての家についた後、シグナム達は事の事情をはやて本人から説明してもらい、まさに穴があつたら入りたい思いをした。

「つまり、マオは主はやてのご家族で、我らはそれを敵と勘違いして攻撃してしまつた…という事なのですか…？」

つまり四人は、例え知らなかつたとはいえ、とんでもない事をしてしまつた事になる。よもや、主の家族に手を上げたとなつては、死を覚悟する他無いだろう。

「で、でも！それならそうと早く言ってくればよかつたじゃんか！」

ヴィータの言い分ももつともである。が、ヴィータの態度は主を前にしてとつていいものなのだろうか…。

しかし、思わずには要られない。最初から分かつていれさえすれば、あの様にはならなかつた筈…と。

「いきなり、それこそ有無を言わず切りかかつてくる奴が…大人しく話を聞くとはい到底思えなくてな…」

マオの瞳は主にシグナムを捉えていた。

視線に耐えきれなくなったシグナムは、言い訳がましく反論を試みようとするも、どう考えても言い分が思い付かず、結局何も言い返せなくなつてしまつた。

そう、何事も最初に手を出した者が悪いのだ…

(今思い返せば、あの時のマオは主はやてを守るかの様に構えていた様に思える…。ならば我らの敵である可能性は極めて低いだろう

…くっ、なんとということだ…)

マオに責められ俯いているシグナムを見かねたはやては、横から助け船を出す。

「まあ、誤解が解けたんやから良かったやん。幸い誰も怪我せへんかったし。それよりも、あの飛んだりしてたのは…一体なんなん？」

その後、シグナム達四人は心の広い主のはやてに感謝しながら、自分達の存在、闇の書の蒐集、そして魔法についての説明を簡単にした。

「うーん、魔法があるってことは実際見たから何とかわかったんやけど、その…しゅーしゅー？っていうのがイマイチよくわからへんのよ。マオはわかる？」

「いまいち話を理解出来ないはやては、マオならば分かりやすく説明してくれると思ひ、聞いてみる事にした。

「……………つまり、他人に迷惑をかけて自分の願ひ事を叶えるか、このまま6人で仲良く暮らすかって事じゃないかな……………」

「はやてにとつてマオの説明は非常に判りやすいものだったが、どうもいつもよりアバウトな気がしてならなかった。

「もしかして…マオ、眠いんやろ？」

寝る前、及び寝起きはマオの数少ないウィークポイント。その時の反応をほぼ把握しているはやてにとつて、今のマオの心境を察する事は半熟状態の目玉焼きを作るより容易だった。

「まあな……………」

案の定だった。マオは今さっきまで戦闘をしていたのだから仕方無いだろう。それに、普段自分の心情を口にしないマオが、珍しくも「今日は…疲れた…」と呟いているのははやては耳にしていた。

これは話もそこそこにして、早急に就寝へと話を持っていかねばとはやては考える。

(まあ、当然私も眠いんやけどね…)

「四人共、よく聞いてほしい…私は、しゅーしゅーなんてのぞまへん。ただ、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラの四人が、私とマオの家族として一緒に暮らしてくれたらいいなーって思うんやけど…。」 どうやるか？」

四人は少しの間呆然としていたが、暫くするとはやての言葉を理解したのか、二つ返事で了承した。

その後ははやてたつての要望で、六人一緒に寝る事となった。そして皆はその為の布団を準備をしていたのだが、そこではやてはある重要な事を思い出したので聞く事にした。

「そういえばさっきのマオ、 ちょっとの間目があかくなつたやん？それも驚いたんやけど、その後のマオはいつもと雰囲気が変わつたように見えたんよ…。」

もしかしたらマオ、【怒って】たんやないかなーって思うんやけど…?」

そう、はやてにはあの時マオが怒っている様に見えたのだ。はやての質問にシグナム達が？マークを浮かべていたので、はやてはマオの事について簡単に説明した。

「わからない…。ただ、怯えているはやてを見たら、なんだかこう…胸の辺りがモヤモヤした 感じになつたんだが…」

(それってつまり、私の為に怒ってくれたって事やよね…？ マオ、怒りの感情はわからへんはずなのに… 私の為に…怒ってくれたんか…)

…なんだか照れてまうな…(/ /)

「マオ、きつとそのモヤモヤが【怒り】って感情なんやと思うよ？ シグナムはどう思う？」

はやては、流石に難しい内容という事もあり、実際マオと対峙していたシグナムに話をふった。

「はい、マオはあの時確かに怒っていたのだと思います。あの静かながらも激しい気迫には、我らも戦慄を隠せませんでした」

シグナムがなんとも申し訳なさそうに答えたので、このままでは全体のムードが暗くなってしまうと思い、はやては話の方向を少し変えた。

「誰かの為に怒れるっていうのは、とつてもいいことなんやと、わたしは思う。それに、マオがわたしの為に怒ってくれたのなら、こんなに嬉しい事はない」

「はやて…」

四人の騎士は、自分達に対する主の対応が今までと明らかに違うことに戸惑いながらも、はやてとマオの信頼関係を目の当たりにし、過去記憶に無い心からの充足を感じていた…

部屋は就寝の準備が整い、約一時間前まで真剣勝負を繰り広げあっていた者同士が共に寝るといふ奇妙な光景が広がっていた。

明かりを消した暗い部屋の中で、マオは眠いのを堪えて思いにふける。

（そうか…。 あれが…。【怒り】なのか…。 そうなんだな…。 オレの中で欠けていたピースが…。また一つ、埋まった気がする…。）

「あれが…。怒りか…。 良い物じゃ…。ないな…」

自然と呟いていたマオに、暗闇の中はやては笑顔を向けて答えた。「確かに良い物や無いかもしれへん。でもな、もう一度言う事になるけど…。マオが私の為に怒ってくれて、私はとっても嬉しいんよ…。？ そりゃ我慢せなあかん時も多いんやけど、マオはお利口さんやからな、マオが怒りたい時は我慢しない方がマオ自身の為にも他の誰か

の為にもなると思うんよ……」

（ 自分の為にも、誰かの為にも、か…… ）

「 そういう…物なのか……？ 」

「 そういう物なんよ。 」

「 …………… 」

そこで話は途絶え、マオ達はいつの間にか仲良く…深い眠りについていた…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1136x/>

魔法少女リリカルなのはA's～夜天の王と無窮の魔王～

2011年12月24日01時58分発行